

3891
N 37



始



389.1
N37 13.



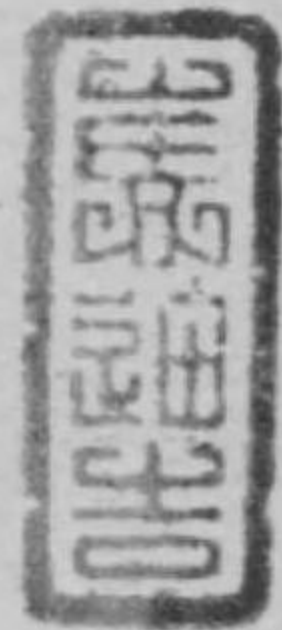
日本民族論
著者 中村五郎 文學士



松雲堂發行

大正
6. 28
内交

造數
風影



丙辰書

八十七翁

法隆院



348-375

日本民族論序

凡そ世界の文明國なるものを見るに一として自國の研究を以て先きとなさざるはなし。是れ單に長を採り短を補はんとするのみにはあらず、愛國心を鼓吹し共同一致の精神を養成せんとする所以なり。自國を知るは、一切の事業を經營し、學問に従事せんとするに當り、先づ起り來るべき所の動機なり。メークラテースがデルファイの神殿に於て受けたる所の託宣は此に之を應用するを得べし。學者何の

二
學を選ばんとするか。日本に必要なものに外ならざるべし。經營家何の事業に従はんとするか。日本に需要せらるゝものに他ならざるべし。乃ち日本研究の學問事業に於ける、恰も一指を以て羣馬を御するが如し。されば日本の研究は學問として大なる意味あるのみならず、事業としても亦大なる意味ありといふべきなり。大學に於ても日本の言語なり、歴史なり、人種なり、文明なり、社會なり、凡百の方面を研究すべく、民間に於ても亦盛んに之を行ふべく、日本の研究に於いては、外國人をして殆んど容喙

の餘地なからしむべきなり。乃ち日本の研究は日本人の精神を支配し、之を中心として他の學問に従事し、事業を經營するに至るべきなり。余茲に見る所あり。日本の研究を以て畢生の事業と心得、嘗て「日本社會の發達」を著はし、又「日本我」を著はし、其の一端を披瀝せり。固と多忙の餘暇に成れるもの、杜撰疎漏なるを遺憾とするのみ。比者中村君、やまと民族論を著はし、余が序を要めらる。披して之を見るに、日本民族の特性を論じ、神代の思想を叙し、國體の精華を發揮し、委曲詳案餘す所なし。君嘗て日本古

代史を著はし、高天原京師の説を成す。余其の高見に服す。今此書を見て益々君の學識に服す。余や淺學不才、君の序を要めらるゝに及び敢て當らざるの感極めて切なるものあり。再三辭すれども許されず。乃ち本書が日本の學問に取り、將た又日本の事業に取りて必要な所以と、余が君と同志なる所以とを述べ、以て序に代ふといふ。

大正五年六月於集園學舎

文學博士 遠藤隆吉識す

日本民族論目次

序論

第一篇 建國祖神論

一、高天原の卷……………五

世界各國は朝に興り夕に亡ぶ。光輝ある我が國史の成跡と神代の研究の必要。高天原の天上説。高天原の地上説。其一、内地説。高天原の地上説。其二、海外説。海外説の謬見。神は天上のものに非ず。高天原の語義。古史に見えたる高天原の概念。高天原の所在。高天原と黄泉國、夜見國、根國の關係。極遠の根國。高天原と常世國との關係。今日の謂ゆる皇居若くは帝都。

二、神の本質の卷……………三六

神は人格的神格者なり。神の語義。神と尊及び命。神と現神及び天皇と帝。日子及び日女。神格とは何ぞ。神格の實質。神の理想的大

道 神人一體と神人合一 神道の神は多神にして一神なり 耶蘇教に於ける神の概念 耶蘇教の神は唯一神にして多神なり 猶太教の神と耶蘇教の神との別 佛教の神 儒教の神 神儒佛耶の神に關する概括的比較 神に關する外來思想の影響 變化したる神道の神

三、神の活動の卷

..... 八八

神の思想の雄大崇高なる大自然 獨化の三神 造化の神 別天神五柱の獨化 葦原中國の名稱 中央地方分掌の本源 男女耦生の神 伊邪那岐伊邪那美二神の英邁 本邦先住蠻人の状態 國家組織の大命下る 國家組織の本源 大八洲の循環 大日本豊秋津洲 其他の地方の循環 東海東山の化外 諸神の國事分掌 職務より由來せる神の名稱 黄泉軍の顛末 二神の絶縁と伊邪那美神の崩御 伊邪那岐神の西下 天照大神の天下統治 夜之食國の管治 海原の統轄 農耕食饌の道興る 養蠶の業起り又始めて水田を開く 八岐の大蛇退治と天叢雲の名劔 天叢雲劔の献上 神代に於ける武裝及び服装 天之安河の誓約 神性の純潔と皇儲及び皇女の降誕 韓半島の統

治 船と植林事業の勃興 大己貴命の裏日本の經營 北陸方面の循服 少彦名命の協力經營 常世國との往來の要津 葦原中國の統一 天安河原の會議 大己貴命の領土奉還 皇化更に東海東山に及ぶ 高天原と出雲との密接關係 天孫瓊杵尊の筑紫降臨 猿田彦大神及び供奉の諸神 高千穂之穗觸峯 高千穂之穗觸の語解 吾田長屋笠狭之碕の皇居 吾田の解 長屋の解 笠狭碕の解 天孫の御事蹟 即位の大禮と大嘗祭 木花開耶姬命の入内と三皇子の降誕 兒湯郡齋殿原及び其の附近の遺跡 海幸山幸の交換 隼人及び禁闕護衛の職 火闌降命の後裔 鷓鴣草葺不合尊の降誕 龍宮の乙姫 高屋山上陵 皇運の培養と海外の經營 宮崎皇居の時代 皇師の東航 白肩の津の遡江 孔舍衙坂の激戰 饒速日命と長髓彦 大和の背撃と熊野の迂廻 吉野の巡幸 丹生川畔の祭神 南部大和の平定 長髓彦の誅戮 殘賊の平定 橿原奠都 即位祭神及び官職の設定

第二篇 民族及民性論

一、建國祖神渡來の卷……………二五一

建國祖神は文明の種族||我國在來の原人種||祖神の人種的系統(其の
 一)||南方人種||掘立小屋||獨木舟の操縦||武器及び假面の使用||父
 子襲名の遺風||我邦に於ける涅齒の習俗||建國祖神は文身族に非ず
 ||祖神の人種的系統(其の二)||北部亞細亞人種||古亞細亞人種||系に
 せいあんす族||韃靼種族||通古斯族殊に東胡族||蒙古族及び土耳其
 族||日蒙兩語の文法上的一致||日韓兩國の風習及び人種||建國祖神
 は烏拉阿爾泰系族

二、日本民族の解剖……………三〇四

蝦夷及び熊襲||隼人種族||吾田種族||出雲種族||南方人種||北方人
 種||神代以後に於ける各種族の渡來||多種多様の人種

三、日本民性の同化力……………三三二

至誠純潔の精神||民族の同化||制度文物の同化||同化力の眞髓||儒

教の日本化||上古字文なし||漢字の傳來||聖德太子の憲法十七條||
 本邦修史の先鞭||萬葉假字||片假名四十五字||平假名の發明||漢文
 の衰頹||變體漢文||文學は全く僧侶の手||朱氏學||紅葉山文庫||昌
 平覺||儒學神道||異學の禁||寛政の三奇人||國學の復古||羽倉學||
 國學の三大人||神道の分離||復古神道||水戸派の學||日本化された
 る儒教||佛教の日本化||佛教の傳來||佛像及び寺院||殺傷誅戮の殘
 虐||聖德太子||佛教は隆盛の頂點||神佛の衝突||本地垂跡說||神宮
 寺||兩部神道||僧兵の起原||武人僧徒の衝突||一向宗亂||佛教の衰
 頹||明治維新の光明||佛教輸入當時の悲惨の狀況を追憶せよ||信仰
 以外に更に信||惰性的に存在を認む||耶蘇教の將來||耶蘇教の傳來
 ||豊後國神宮寺浦||種子島の西村||鹿兒島は布教の最初の地||肥前、
 周防、豊後||羅馬法王に謁して||南蠻寺||切支丹宗門の禁令||耶蘇教
 の衰退||信徒二千餘人||海外通商の利||海外渡航者の有名||再び耶
 蘇教を禁じ||鎖國政策||實に二十八萬人||禁書||島原の亂||宗門改
 め||蹈繪||信教の自由||神佛耶三教の會合||日本宗教大會||宗教と

は如何なるものなりや 神道と他の宗教との關係 神道に經典聖書ありや 如何なる宗教の教義 神道の實修實行の口誌 之を佛教に見るに 之を儒教に見るに 更に之を耶蘇教に見るに 宗教の教理と宇宙の眞理 宗教の合一

四、犧牲的精神の發揮

四七四

自己の利害を顧みず 自己本位 國家社會を本位 日本魂 千世一貫始終不斷 金甌無缺の國體 日清戰爭の當時 北清團匪の亂 割に合はぬ 日露の役 最近の日獨戰爭 獨軍の見當違ひの逆襲 世に堺事件 佛蘭西公使の兩手は震へてゐる 軍艦指して一目散 金を犠牲とする 富國強兵を國是 生産事業を獎勵 不生産事業を獎勵 又も敗れたか八聯隊 割に合はぬ 忠君愛國 忠君は即ち愛國 大義は親を滅せざるにあり 生命を犠牲 殉死 純忠至誠の極美 殉死の禁令 殉死の風益盛に赴き 婦人の殉死者 殉死者の選定 商賈 峻嚴なる禁令 陸軍大將伯爵乃木希典夫妻

第三篇 國體の眞髓

一、高大無邊の神德

五二五

未だ曾て革命なるものなく 皇室は超然として其の戰亂雲霧の上に立ち 祈年祭の祝詞に 開國進取の國是 建國創業の始祖 一心同體の實を結ぶ 宜しく此の漂へる國を造り固めよ 皆悉く生成愛撫の神德 美はしき青人草 皇位と國君とに抱合溶和

二、尊卑分脈と姓氏の起原

五三九

氏族 皇室を中心として抱合融和し 姓 皆職名より由來 臣連 伴造 國造 天皇には姓氏 盟神探湯 氏の長者は即ち氏の上 神別、皇別、蕃別 皇族に姓を賜はる者多く 源平藤橘の四族 寛永重修系譜 華、士族、平民 氏神 氏寺 血族團體は變じて地域團體 産土神

三、敬神祭祀

五六一

神道は即ち皇道 斯る一心同體たるの實 神人の歸一があり君臣の一體があり 謂ゆる神明に通じ 敬愛相俟つて初めて自他茲に合一し 自己の至誠を徹底するが爲めで 稷稷 清淨潔齋 我が國土の

山水明媚||其の至誠は實に始終なく窮極なく||要するに日本の風光の美なるは||忠孝一本の大道||其の祖先を崇敬するの精神||天照大神の大詔||三種の神器||此の鏡を視ること猶ほ吾を視るが如くせよ||日夕吾を拜くが如くに齋き奉れ||報本反始の至孝||敬神祭祀は即ち治國安民の要道||祭政一致の國體

四、政教一體

五九二

天照大神の大詔に||資祚の無窮と皇統の萬世一系||國體と政體||萬機公論に決せん||天齋殿の變事||天安河原の會議||天齋殿前の神樂||太古の風習||左右准の法と夫唱婦和の大道||禁厭咒法||美術の淵源||其の國家の法律||天つ罪國つ罪||道とは何ぞや||徳とは何ぞや||公德と私徳||道と徳とは離るべからざるもの||常識の判斷||此の道徳を躬行實踐せんが爲めには||道徳は偉大なる力||國民道徳と言ふ||日本國民道徳||國民道徳と國民教育||政教の一體||宗教と道徳||個人の安心立命||故に國民教養の本源は||國家と社會と人との關係は

目次 (終)

日本民族論

文學士 中村徳五郎著

序論

日本と言へば神國、神國と言へば高天原を聯想するが、其の神國とは如何なるもので、其の高天原は何處であるか、又た神と高天原とは如何なる關係を有つてゐるかと言ふ問題は、頗る興味深き研究でなければならぬ。之れと同時に吾等は日本民族である、吾等は日本人であると漫然自信しては居るものゝ、偕て如何なるが、日本民族で、如何なるが日本人であるかと反問さ

れて、的確に明快に即答し得る者が果して幾人あり得るであらうか。或は高天原人種、或は出雲人種、或は吾田種族、或は熊襲種族、若くはアイヌ人種と云ふやうに、種々の名稱の下に區別せられて居たものが、何うして

渾然たる同一種の日本民族

となつたのであるか、又た日本國と言ふものが何うして組織せられたのであるか、將た日本國民精神は何うして涵養せられたかを究めなければ、吾等は日本人である、日本人の本分は斯う言ふものであると了得することは出来ない譯である。是に於て吾等は先づ

日本人たるの信念

と其處に一貫せる大道とを自覺せねばならぬ。苟も日本人にし

て日本人たる所以を了得する事が出来ないとすれば、即ち自己にして自己を知らぬ者である、自己にして自己を知らぬ者は自己を語ることが出来ない、況んや其の他を語るに於てをやである。

されば自己を知つて然る後に他を知るは、眞に他を知る者であり、又た自己を知る者である。故に自己を知らずして先づ他を知ると言ふ者あるは、未だ眞に他を知る者ではない。従つて自覺もなければ信念もないのであるから、徒に他に雷同附和して百害是より生じ百弊茲に萌すのである。即ち或は日本固有の道徳を無視し、又或は國體と相容れざる暴論を敢てする者あるが如きは、此の光輝ある日本民族の由て來る所を自ら辨へざるの致す所に外ならぬ。さればこそ節義地を掃ひ輕佻風を成し、朝

に虚榮の雲に閉され、夕に墮落の深淵に沈み、浮華驕奢に流れて荒怠日に募らんとするなどは、洵に憂ふべき現代の悪傾向てはあるまいか。斯の如きは畢竟

光輝ある國史の成跡

を輕んじて、日本民族たるの信念を體得せぬからである。故に之を國家永遠の爲めに計るに、今の時先づ建國の由來を究めて神秘の幕を切り落し、日月と光明を争ひ天地と終始を共にせる萬古一貫の大道を明にするは、實に焦眉の急務でなければならぬ。吾人が茲に日本民族論を草するに至れるは即ち之れが爲めである。

第一篇 建國祖神論

一 高天原の卷

世界始つて以來、國を成せるものは殆んど無數であるが、而かも建國の當初より萬世一系の皇統を奉戴して金甌無缺の國體を有し、時の古今を問はず地の東西を論ぜず、超然として興廢存亡の外に卓立するものは、我が日本帝國を除いては他に無いのである。見渡す所

世界各國は朝に興り夕に亡ぶ

と言ふ有様で、其の昔は勢威東西を厭した國でも、民心の腐敗の爲めに自滅した者もあり、或は革命内亂、或は外敵の乗ずる所となつて、王室を顛覆し社稷を失つた者もある。斯う言ふ國

國では、今の今まで仇敵であつた者を新に君主と仰ぐの奇觀を呈するから、君主と國民との間には常に隔意を存し、何時如何なる場合に叛亂の勃發せぬとも限らぬ。故に君主は之れが豫防策に汲々とし、或は言論を束縛し、或は威厭を加へて一時を糊塗し、或は虐戮を敢てして餘孽を屠りながらも、尙ほ戦々競々として常に薄氷を履むの感に打たれ、美酒佳肴も常に鳩毒の混入を疑はざるを得ない者もある。其の君主にして既に然りとせば、下民は尙ほ更ら其の堵に安んずることが出来ないから、一朝内外の變亂に際して機に乗ずべきものでもあれば、叛賊忽ち四方に蜂起し、國を擧げて支離滅裂に屬することになる。其の危きこと累卵も啻ならず、千鈞を僅に一絲に繋ぐものと言はねばならぬ。

光輝ある我が國史の成跡と神代の研究の必要

されば古代に於ける希臘羅馬の盛世は、今は昔の夢の跡で、其の拉典語は既に世界の死語となつてゐる。或は猶太國民の往時を顧みて、離散流寓の現状を目撃するならば、誰か其の悲境に沈淪するを憐まぬ者があらう。若し夫れ巴比倫、ニネベの古城墟を訪ひ、「ナグリス及びユウフラテース」の河流に臨みて、靜に千古の月に對したなら、遙に興廢存亡の迹を追懷して、轉無量の感慨に堪へぬものがあるであらう。將た又た佛教の東漸以後に於ける印度の衰頹は遂に挽回するの時なく、今は其の獨立を失つて、他に隸屬するの羞辱に甘んじてゐる。或は世界に誇りし三角尖塔も、亦た徒らに古代埃及の盛時を物語るに止まり、「ナイル」河畔の天惠の沃土には、己に業に建國の祖業を認めるこ

とが出来ない。或は又た亞歐二洲を震駭せしめたる成吉思汗の雄圖も、唯過ぎし史上の異彩として、空しく一場の夢物語となつてゐる。されば五千年の歴史を有する我が隣邦の支那とても其の實は唐虞三代の昔より幾變轉を重ね來て、屢々不俱戴天の仇敵を帝王に仰ぎ、今は中華民國として共和政治を行ひつゝ、更に又た帝政に一變せんとする有様である。斯る興廢消長の跡を顧みて、光輝赫々たる我が日本帝國の歴史に對するの時、誰かは萬邦無比の國體を虔仰せぬ者やあらう。而かも此の萬邦無比の國體は、其の根源を神道に發し、神道の本據は即ち高天原にあるのであるから、吾等は先づ高天原の何物なるかを釋ねて然る後に神道の精髓を探らねばならぬ。尤も過去に於ける神秘時代は、イザ知らず苟も世界の日本國たる今日に於ては、神代の

事蹟を闡明し、高天原の所在を探求し、進んで神道の本義を研鑽することは、益々國光を顯揚する所以であるから、今に於て



吾等は遅れ馳せながらも、先人の閉ざせる雲霧を排いて、新に天日の光明を見るべく、之れが討究を忽緒に附し去ることの出来ないのは勿論

である。

高天原の天上説

從來國民一般の信ずる所を見るに、高天原は上天の虚空である

と解してゐるやうである。従つて高天原に神集ります八百萬の神々を理想上の靈象なるかの如く考へてゐるやうに思はれる。此の上天の虚空であると言ふことは、専ら本居宣長の「古事記傳」に依つて流説したものであるが、併し宣長以前に於ける謂ゆる神道家の間には、一般に高天原の天上説を信じてゐるもので、大正の御代の今日と雖も尙ほ概ね此の説を固守しつゝ、あるやうに見受ける。尤も此の説は神代の事蹟を神秘に附せねばならぬ時代に於ては、或は國民教養の上に必要な方策であつたかも知れぬ。此の意味に於て水戸の「大日本史」さへも、太古の事は遼焉にして稽ふべからずと言つてゐるのであるが、其れは時勢の然らしむる所で、深く神代の事蹟を研究すると却て當時の國民思潮に悪影響を與ふるの虞があつたからであらうと思はれる。

従つて神代の事蹟を研究する學者に乏しくして、益々神秘の裡に閉さるる事となり、遂には希臘、羅馬、埃及、印度などの神話時代と同一に見做すものさへあるに至つたから、高天原の天上説は、今も尙ほ依然として勢力を占めてゐる譯である。

高天原の地上説——其一、内地説

併しながら天上説に嫌焉たらぬ學者は又た地上説を唱へてゐる。此の地上説には更に二大別があつて、一は日本内地説、一は海外説である。其の内地説も亦た種々に分れて、或は常陸國多珂郡であると言ひ、或は大和國橿原であると言ひ、又は豊前豊後地方であるとも言つてゐる。此の常陸國多珂郡の説は新井白石の唱ふる所で、白石は高天原の「高」を高國即ち常陸風土記に見ゆる多珂國で、後の多珂郡の地であると説き、其の「天」は「海」であり、

「原は古語の上」であるとして、高天原を多珂郡の海上なりと唱へたのであるが、此の説は寧ろ海上説で而かも地上説の一種とも見られ得る。併し原を古語の上とし、「天を海」とすることは、探るに足らざる牽強附會で、白石ほどの學者にも似合はぬことである。更に「高を高國」と解するさへ既に何等の根據もなきに、幸に常陸國に多珂郡あればとて直に之れに附會するに至つては危険も亦た甚だしと言はねばならぬ。或は大和の檀原を高天原なりとする事は内藤耻叟の説であるが、此の説は根據もあり考證も確實で、大に首肯するに足るのである。唯だ惜むらくは獨り檀原のみに限定することの偏僻たるを免かれぬ事である。若し夫れ豊前豊後地方なりと言ふは多田南嶺の説であるが、此の地方には景行天皇の熊襲親征と、神武天皇の東征の御事蹟と

の外、上古に關する史跡を傳へておないから、高天原を説くには其の史跡が餘りに若過ぎるのである。要するに地上説中の内地説にも未だ満足に値するものがない。

高天原の地上説——其二、海外説

然らば其の海外説は何うであるかと言ふに、高天原は朝鮮である。或は支那である。印度である。南洋である。若くは希臘であると言ふやうに、種々雑多の説が唱へられてゐる。尤も此等の説は明治以後の新智識の人々が、天上説にも内地説にも嫌焉たらぬ所から、建國祖神族が此の日本に渡來せられざる以前の故土に遡つて尋繹せんとするより起るものである。而かも祖神族の故土は何處であるかに就ては、或は南洋説もあり、印度説もあり、朝鮮説もあり、支那説もあり、蒙古説もあり、土耳其

説もあり、巴比倫亞説もあり、「アツシリア」説もあり、近來は希臘説を唱へる者もあるから、高天原を海外に求めやうとすれば従つて祖神族の故土に關する異説と共に千變萬化せねばならぬ筈であるが、併し高天原を海外に求めやうとすることが既に謬見であるから、謬見に基づく研究は固より徒勞である。

海外説の謬見

然らば高天原を海外に求めることが何故に謬見であるかと言ふに、高天原は建國の祖神族が此の日本に渡來せられてからの高天原で、渡來せられざる以前の故土に於ける高天原ではない。或は其の故土に於ても高天原なるものがあつたかも知れぬ。併し其れは古傳には見えてゐない。古傳に見えてゐるものは即ち日本あつての高天原、高天原あつての日本であるから、祖神族

の故土は世界の何れの地方であらうとも、既に此の日本國土に渡來せられ、一族此の國土に繁盛し、以て大日本帝國を建設せられたる以上、高天原は其の祖神族の主腦たる天つ神の所在地で、又た神代に於ける政令の中心地たることは、古傳の證明する所であるから、之を海外に求めんとするの不合理なるは多言を待たぬのである。

神は天上のものに非ず

以上の如く内地説も不完全であり、海外説も謬見に基づく徒勞であるとするれば、矢張り天上説に歸せねばならぬかと言ふに、決して然うてはない。何となれば建國の祖神は即ち歴代天皇の祖宗であらせられ、又た實に吾等日本民族の大祖であるから、泰西諸國で言ふ所の理想的靈象たる神ではない。即ち無形の抽

象的心靈ではなくして、有形の實際的人格者である。故に住むには家あり、食ふに米穀があり、着るに衣服があつて、天照大御神の如きは手づから機を織らせられてゐる。併し其の明德日月の如く、天人歸一の域にあらせられたから、人格者であつて神格を具備せられたのである。之れは獨り天照大御神のみではなく、總べての神々は皆左様であり、更に歴代の天皇も亦た人格者で神格を具へられてゐるから、天皇を一に現神と申すのである。斯う言ふ譯で神代の神々とても其の衣食住の缺くべからざるは勿論であるから、政令發途の高天原、天つ神の住所たる高天原は、固より日本内地で、決して上天の虚空でないことは、科學の進歩せる今日ならずとも容易く首肯し得らるべき筈である。然らば高天原とは何を意味するか、其の所在地は何處であ

るかと言ふことが、更に研究の問題である。

高天原の語義

是に於て吾等は先づ高天原の語義を究めねはならぬ。熟々考ふるに高天原の「高」は、新井白石の言へるが如き高國の意味ではなくして、「天」の敬稱でなければならぬ。即ち高皇産靈神の「高」、高千穂の「高」、高御座の「高」と同じく尊稱である。而して其の「天」は天地の「天」で、地に對する尊貴高尚の意味を表し、「上る」「崇める」「仰ぐ」など同一の語源から發してゐるが、併し其の天を以て直に天地の天と解する時は、彼の本居宣長の天上説に陥るのである。即ち高天原の天は、地祇に對する天神の畧稱で、高天原とは尊嚴なる天神の坐します原と言ふ意味である。然らば其の「原」とは何う言ふ意義であるか、之を同一の阿爾泰語系に屬する日

韓兩語の語源に遡つて研究するの必要がある。即ち原は百濟の夫里、高勾麗の忽、及び溝瀆、新羅の伐、弗、火、任那の牟盧及び模盧、高勾麗好太王の碑文に見ゆる鴨盧、梁書の新羅傳に見ゆる牟羅即ち村、魏志並に後漢書の韓傳に見ゆる卑離、日本書紀の神代卷に見ゆる新羅の地名なる曾尸茂梨の茂梨などは、皆現今我が國に於て唱ふる村と同語であつて、時には城邑と言ふ場合に用ひられ、時には村里と言ふ場合に用ひられてゐる。而して此等の古語の我國に現存してゐるものは、地名の語尾に附せらるる所の觸、張、壑、原などである。即ち日向之高千穂之穗觸の觸、尾張國の張、伊賀國名張郡の張、推古天皇の小壑田宮の壑、橘小戸之阿波岐原の原などが夫れであつて、何れも皆村の古訓たる夫里、牟盧、茂梨と同語異字たるに過ぎぬ。而

して其の意義は「治」「開」「晴」と同様で、皆共に開拓の意を有し、森林を拓き土地を開墾して住居の場所と爲すに依つて稱するのである。即ち土地を拓きて人家の集つたのが村である。更に此の集團の意味よりして樹木の集つたのを森、人若くは物の集りを群と言ふのも、亦た皆同語であるが、唯だ其の場合に應じて漢字の村、森、群などを藉りて區別した迄である。故に吾等の頭顧が圓塊を成せる所から之を頭と言ふのも、亦た同一の語源たる牟離、夫里、茂梨から出てゐるのである。現に薩摩の地名に飯牟禮又は牟禮と言ふのがある、其の牟禮は即ち村の古語である。又た豊後の地名に宇目牟禮と言ふのがあつて、天正五年に大友宗麟が島津義久と戦ふ時、此の宇目牟禮を経て日向に進軍した事が當時の舊記に見えてゐる、今は之を重岡村と改稱

せられてゐるが、其の牟禮も亦た村の古語である。且つ又た日向、大隅、薩摩の地方では、原を「ハル」若くは「バル」と呼んでゐる。即ち兒湯郡齋殿原、同郡新田原、月中原、西諸縣郡高原、北諸縣郡繩瀨村千原などの類が枚擧に遑もないのであるが、其の原は壑又は治と共に卑離、牟盧、牟羅と同義同語で、即ち城邑村里である。而かも九州南部に於て原と稱せらるる場所に限つて總べて高原で、今日普通に平野廣原と言はるる處よりも一段高く、遙に之を望めば連続せる一帯の丘脈であるが、其の丘脈に上つて見れば、豈に斗らんや廣濶たる原野で、四方の展望最も絶佳である。斯う言ふ所が總べて「原」と稱せられて、其處には概ね石器時代の遺物と共に建國祖神族の系統たる古墳及び裝飾品馬具、刀劍、祭器等の遺物を發見することが出来る。之れに依

つて考ふるに古代に於ける城邑村里たる原又は牟禮なるものは斯る高原の地であつて、決して海濱若くは河畔の低地でなかつたものと信ぜられるのである。序でながら「郡」と言ふ詞を解釋して置かうと思ふ。郡の「ヨ」は韓語の固、健、若くは居、蒙古語の可汗即ち大王の意義の可と同じく「大」であつて、其の「ホリ」は即ち夫里、卑離、牟禮、村と同じく、城邑村里であるから、郡は取りも直さず大邑又は大村の意義に外ならぬのである。

古史に見えたる高天原の概念

以上の研究に依つて「高天原」とは尊嚴なる天神の坐せる城邑と言ふ意義であることが判るから、是に於て吾等は古史に見えたる高天原の概念を作ることが出来る。即ち古事記及び日本書紀の一書に據れば、天地初發の時、天御中主神先づ高天原に成り坐

し、次に高皇産靈神、次に神皇産靈神成り坐す、之を造化の三柱の神と謂ふと見えてゐる。即ち此の三柱の神は、我國開闢の基を啓ける萬物造化の祖神であるから、其の成り坐せる高天原は國家を經營せらるべき天神の所在地である。而して茲に成り坐せると言ふは、即ち其の地に出現して居所を定められたることであるから、出現せられたる居所が高天原であるが、高天原なる處があつて其處へ出現せられたのではない。凡そ古史を讀まんとするには常に斯る注意が必要であるから、古史の爲めに讀まれざるやう心懸けねばならぬ。然るに此の高天原は、或は略稱して單に天と言はれてゐる。即ち伊邪那岐神が大八洲經營の功を全うせられし時、天に上りて天神に復り報ずと見えたる天は高天原であつて、國家經營の顛末を天神に復命せられたの

である。其の伊邪那岐神が多くの御子を生み給へる中にも、天照大神は別けて英明に互らせられたので、古事記には汝尊は高天原を治らすべしと詔らせ給へるを、日本書紀には當に天に送りて授くるに天上の事を以てすべしと見えてゐる。其の天は即ち高天原で、國家統治の主權者の所在地であるから、天上の事と言ふは即ち又た萬機を總攬せらるゝことである。更に天忍穗耳尊が地方の巡狩より高天原に還り給へるを、復た天に還ると見えてゐる。されば天は高天原の略稱であるから、高天原に坐す神を天神と言ひ、地方分管の神を國神又は地祇と言ふのである。故に神々が地方より高天原に還幸せらるるを天に上る又は天に還ると言はるるやうに、高天原より地方に向はせらるるを天降り坐すと言ふのである。即ち素戔嗚尊が高天原より出雲に

赴かるるに當り、古史には之を天より出雲國簸之川上に降り到る」と記し、又た天照大神の皇孫なる瓊瓊杵尊が高天原より日向に赴かせられたるを、「日向之高千穗之穗觸峰に天降り坐す」と言ひ傳へてゐる。要するに「天降り坐す」と言ふことは、後世の「御下向」と言ふの類で、「天に上るとは上洛する若くは上京する」と言ふのと同じである。故に今日に於ても皇都を中心として「上る」又は「下ると言ふ如く、神代に於ては高天原を中心としたのであつて其の高天原は即ち後世に言ふ所の皇都である。

高天原の所在

既に高天原は後世に言ふ所の皇都であることが明瞭となつた、然らば神代の皇都たる高天原は何處であるかと言ふに、天地初發の時に天御中主神が成り坐せる高天原は、今日よりして之を

考ふるの史料を缺いてゐるが、伊邪那岐神の時代の高天原は大和の天香山の附近であつたらしく考へられる。即ち天香山の天は、高天原の略稱たる天で、伊邪那岐神が將に西九州に向つて天降りし給はんとするに臨み、恰も伊邪那美神が出雲で崩御あらせられたるを聞き給ひて慟哭禁じ難く、瀧つ瀬なして放り落つる涙は遂に大和の天香山の畝尾の木本に坐す泣澤女神を生めりと古史に傳へてゐる所を見れば、其の當時の高天原は天香山の附近であつたであらうと思はれる。今も香久山村大字木之本に啼澤社と言ふがあり、又た畝尾神社があつて、此神社は延喜式に見えたる畝尾都多本神社である。更に天照大神の御世の高天原は何處であるかと言ふに、同じく大和國高市郡の地域であつたらしく思はれる。开は出雲を平定したる武甕槌命と經津主

命とが、大己貴命以下の歸順の諸神を率ゐて大和の高市に凱旋し、天照大神及び高皇産靈神に復命するに八十萬神達の誠欸の事を以てしてゐる。且つ大己貴命が爾來高天原の護衛の爲めに己が幸魂奇魂を三諸山に齎きて大三輪神と言つてゐるが、其の大三輪は和名抄に見ゆる大和國城上郡大神郷で、後の磯城郡三輪村である。而して三諸山は即ち三輪山で、一に東山と言つて三輪村の東、初瀬村の西にある。斯くて大己貴命は其の子阿遲鉏高日子根命を葛城の加茂に居らしめ、其の裔に加茂君があり大三輪君があり、又た賀夜奈流美命を高市郡飛鳥村に、事代主命を同郡雲梯村に居らしめて高天原の護衛に任せしめ、事代主命の女なる姫踏躰五十鈴姫命は、神武天皇の檀原奠都の後、天皇の皇后と爲らせ給ふたのであるから、此等の事蹟に徴して見

れば、天照大神の御世の高天原は大和の高市郡の域内で、同じく天香山の附近であつたらしく考へられるのである。然るに瓊杵尊以來三代の高天原は日向の高千穂宮に轉じたのであるが神武天皇に至つて再び大和に遷都あらせられて、其の皇居の地名に依り檀原宮と呼ばるることになつたのである。斯くて神武天皇以後の歴代の皇居は、綏靖天皇の葛城高丘宮、仁徳天皇の難波の高津宮、天智天皇の志賀の大津宮と言ふやうに、皆其の地名を呼ぶことになつた。併し神代に於ては未だ地名の定まらぬ所が多かつたから、其の皇居も高天原と言へる汎稱に過ぎなかつたのであるが、之を尊嚴なる天神の坐す城邑即ち紀元以後の「皇居」又は「帝都」の意味よりして言へば、神武天皇の御代の高天原は大和の檀原である。天智天皇の御代の高天原は志賀の大津

宮である。元明天皇以後七朝の高天原は奈良である。桓武天皇以來一千年間の高天原は京都である。明治維新以後の高天原は即ち實に東京である。

高天原と黄泉國、夜見國、根國の關係

斯う言ふ譯で高天原は神代に於て此の日本國家を經營統治せらるる所の天神の坐す城邑、即ち後世の謂ゆる帝都であるから、其の尊嚴は言ふ迄もないことであつて、此の高天原に坐す神々は、天御中主神、天常立神、天照大神、天忍穗耳命、天津彦彦火瓊瓊杵尊、天火明命と言ふやうに、多くは其の神名に冠するに天を以てして國神と區別し、更に君臣上下貴賤尊卑の別を明にせられてゐるものは、即ち實に其の神聖尊嚴を神名の上の於ても表昭せられ、斯くて開闢の當初より既に先天統治の大權を



太古穴居の遺跡

確立保有あらせられた所以である。されば天神の坐せる高天原の尊嚴なるは勿論の事、其の他の地方との文野の程度に於ても亦た非常なる懸隔のあつたことが想察せられるのである。即ち高天原に對して黄泉國、根國、夜見國又は常世國と言ふやうに賤稱さるる地方のあるのを見ても、亦た高天原の尊嚴と其の開明の度の高さが知られるのである。此の黄泉國は専ら伊邪那美神の經營開拓あらせられた地方で、初めは八雷神、黄泉醜女などの醜穢言ふ

に堪へざる者、並に素戔鳴尊の退治せられたる八岐の大蛇などの異種族が跋扈してゐたのであるが、一に又た夜見國とも根國とも言はれてゐる。即ち夜見は黄泉の約音で、根國と言ふのは其の同義によりて呼ばれたる名稱である。皆共に天上に對する地下の意味を以て、高天原に對する賤稱たるは勿論であるが、之れと同時に文明に對する野蠻、清淨に對する汚穢、都に對する鄙の意を含んでゐて、今の伯耆、出雲、石見などの神代に於ける汎稱である。其の伯耆は即ち母來若くは母城で、素戔鳴尊の出雲入國に先だち、尊の母神たる伊邪那美神が天降り坐せるが爲めに國名となつたものである。其の出雲は素戔鳴尊が八岐大蛇を退治して奇稻田姫を妃とし、宮殿を須賀に營まれた時、折しも慶雲の立騰るを見て八雲起つ出雲八重垣妻ごみに八重垣

つくる其の八重垣をと言ふ歌を詠まれたのが、即ち國名の起源で、而かも此の歌は我國に於ける三十一文字の短歌の濫觴である。而して其の石見は黄泉即ち夜見の遺稱である。

極遠の根國

更に又た韓國を「極遠之根國」と言はれてゐるが、猶ほ恰も遠き田舎と言ふの意味で、素戔鳴尊が其の子五十猛命と共に極遠の根國に赴き、先づ其の居を新羅の曾尸茂梨に定め給ひしことは古史に見えてゐる。而して曾尸茂梨は既に説明したるが如く村の古言で、曾は韓語の牛、尸は頭であるから、即ち世に素戔鳴尊を牛頭天王と唱へるのである。其の曾尸茂梨の地は今江原道春川府の中にあると言はれてゐる。後ち其の居を熊成峯に移されたのであるが、熊成は熊川で、今の忠清道公州の地で

ある。斯くて韓國を統治せられてより再び出雲に還り、爾後専ら山陰方面の經營に當られたのであるが、當時韓國との往來は常に出雲の沿岸よりせられたのであるから、出雲と韓國との關係は神代に於ては最も密接で、即ち出雲地方を根國と言ふと同時に、韓國を極遠の根國と呼ばれた譯である。

高天原と常世國との關係

然るに古史に據れば、黄泉國即ち根國、及び極遠の根國の外に更に常世國と言ふのが見えてゐる。即ち少彥名命が大己貴命と共に山陰北陸方面の裏日本の經營に當り、其の功漸く成るに及びて後事を大己貴命に託し、自から遠く海外に赴かれたのが常世國の古史に見ゆる始めて、後ち神武天皇の東征に先だち、皇兄三毛入野命が又た常世國に赴きて之れが經營に當り、大に皇

謨の伸張を圖り給ひしことが、又た神代卷に見えてゐる。其の常世國とは何處であるか、或は支那の南部であると言ひ、或は滿洲蒙古方面であるとも言はれてゐるが、そもく常世は常夜であつて、即ち常闇の謂であるから、根國又は極遠の根國たる韓半島に比ぶれば更に遠隔の地で、海外萬里にあつて高天原と隔絶し、其の状況を詳にすることが出来ないから、之を常世即ち常夜と唱へたもので、固より特に一地方を指示したる國名若くは地名ではないのである。後ち垂仁天皇の御代に至り、田道間守に勅して常世國に非時香果を求めしめられたことがある。此の田道間守は新羅王子天日槍の後裔で、善く海外の事情に通じてゐたから、特に選ばれて使はしたのであるが、乃ち大命を奉じて往き、十年を費して還つて見れば、天皇既に崩御の後で

あつた。其處で田道間守は哀悼泣號し、悲歎極まつて殉死を遂げたのであるが、此の時歎じて臣曩に大命に由り、遠く絶域に使し、萬里の波濤を踏みて、遙に弱水を渡る、是れ常世の國なり。即ち神仙の秘區、固より常人の臻る所に非ず、是を以て往來の間自ら十年を経たりと言つてゐる。即ち常世國は根國又は黄泉國に比べて遙に隔絶の異域たることが明である。其の求め來れる非時香果は即ち柑橘で、柑橘は素と南方暖地の産、殊に支那楊子江南の温州の名が最も著はれ、之を紀州に栽培して今も尚ほ温州密柑と言つてゐるのが夫れであるから、田道間守が十年を費して往復したる常世國は、即ち支那の楊子江南の地方であると思はれる。併し少彦名命並に三毛入野命の經營せられたる常世國は、果して支那南部であるか、或は馬來半島若くは

南洋方面であるか、但しは滿洲蒙古の方面であるか何うかは、史傳に見えざる以上斷言することは勿論出來ないのであるが、少くとも極遠の根國たる韓半島以外の遠隔の地であつて、支那南部の方面も亦た常世國と呼ばれたと言ふこと丈は確である。之を要するに高天原は、神代に於ける天神が此の日本國家を建設せらるべき發源地で、

今日の謂ゆる皇居若くは帝都

即ち今日の謂ゆる皇居若くは帝都であるから、其の帝都に坐す天神が、地方分管の國神に對して一層の尊嚴を保ち給ひしは勿論の事、之を根國又は黄泉國より見て、更に高天原の神聖清淨なりしは争ふべからざる事實である。殊に極遠の根國たる韓半島の統治、並に一步を進めて海外絶域の常世國を經營せられた

る大猷宏謨が、一に此の高天原より發したるを虔仰するに於て吾等は建國祖神の偉業を頌し奉ると共に、又た世界無二の神道が、此等の祖神に依つて其の本源を高天原に發せられたるの徒爾ならざるを畏まねばならぬ。

二 神の本質の卷

高天原が既に天上の虚空でないとなれば、高天原に坐す神々は又た理想的の靈象でないことも明であるから、

神は人格的神格者なり

神道の神即ち我國の神は、假定的のものでもなく、想像のものでもなく、或は古人の靈魂若くは形骸を言ふのでもなく、又た吾等と絶對に分離して存在するものでもない。即ち過去に於

ては人間として存在せられたる人格的神格者である。故に神道の神は古人もあり又た今人もあつて直接に間接に吾等の祖先たり、吾等の君父たるものである。されば氏神は吾等の小にして近き祖先である。吾等の大にして遠き祖先は神代の神々である。其の近くして大なる神は現代の天皇である。即ち天皇は人格的神格者たる現神であると同時に、吾等の君父であつて、吾等は其の赤子たる臣民である。換言すれば天皇は神代の神々の御延長であり、吾等臣民は神代の神々の赤子たりし祖先の延長であるから、祖先と子孫、父母と赤子の關係に於て、敬愛親和を本旨とし、上下一心萬民同體たるは固より其の所である。

神の語義

そもく我國に於ては、統治の大權を帯びさせ給へる一天萬乘

の大君をかみと稱し、漢字の神を藉りて之れに充當しつあるも、固より漢字の意義に拘泥すべからざるは論を待たぬ。即ち邦語の「かみ」は「上」と同義で、御上と言ひ、主上と言ふも、亦た皆高貴尊嚴にして威靈を備へ給へるを言ふのである。之を日韓滿蒙を経て土耳其に及べる謂ゆる烏拉阿爾泰語系の上から考へても、神は國王若くは君主の義であることが明白である。即ちかむ又はかみは、韓語の「今」又は「久」であつて、其の「きむ」及び「くむ」は國王の義である。新羅に於ては國王を「尼帥今」と言つてゐる。其の「尼帥」は即ち「主」であり、「今」は「君」であるから、尼帥今は君主の義である。或は又た國王及び貴人を居西干、略して居西と言ひ、百濟にては之を韃吉支と言つてゐる。即ち尼帥、居西、吉支は皆同語で、主又は王の義である。邦語の「奇」も亦た之れと同義で

あるが、新撰姓氏錄には新良貴國王と見えて、國王を「居尼岐師」とも言つてゐる。其の「居」は韓語の「大」を意味し、尼は泥即ち土であるから、居尼は大なる土即ち國であり、其岐師は吉支、居西、尼師と共に王の義であつて、居尼岐師とは即ち國王の意義である。蒙古及び土耳其に於ては大王を可汗と言つてゐるが、可汗韓語の居と同じく大で、汗は即ちかむ又はかみである。我國に於ては此の「かむ」に「神」の字を充當した迄であるから、神は即ち國王又は君主の意義であつて、固より無形の靈象若くは理想的心靈でないことは明らかである。

神と尊及び命

此の神は又た尊或は命とも唱へられたのであるが、日本書紀には至貴を尊とし、其の他を命と曰ふと註解を加へてゐる。併し

之を神名の用例に徴するに必ずしも左様でない。例へば伊弉諾神及び伊弉册神を、古事記には伊邪那岐命及び伊邪那美命としてあるのを見ても、此の區別は重きを爲さぬものである。蓋し尊及び命は、御言若くは御事の義で、下民は皆至尊の御言を畏み奉じて臣事し、其の大命は神聖にして敢て違背すべからざるの尊嚴なるに依り、乃ち神皇の稱號に附加する敬語として尊若くは命を用ふるに至つたのである。故に天皇の御命令、即ち勅命、勅令、勅詔、詔命、宣命、宣旨、綸旨、口宣の如きは、何れも之を御言宣と申すのは、命の宣らせ給ふに依るからである。されば天皇をすめらみことと申し奉るは、天が下を統べ治め給ふ命と申す義である。又た皇と申し奉るは、統君の義である。故に大命を奉じて地方を治むる官職に大宰があり、又た國司が

ある。其のみこともち即ち御言持である。更に又た長官を「かみ」と言ひ、地方長官たる國守を「くにかみ」と言ふことも亦た「上」即ち「上長」の意義である。斯の如く神は上と同語同義であつて、韓語蒙古語土耳其古語等の國王君主の義たると同時に、高貴尊嚴の稱呼であるから、紀元以前の神代に於ては、

神に現神及び天皇と帝

一般の下民と區別せらるる爲めに、其の稱號の語尾若くは冠首に神を附け加へられたのである。即ち神皇産靈神、神日本磐余彦尊の御名の如きは冠首に附け加へられた一例で、天常立神、國常立神の如きは語尾に附け加へられた一例であるが、或は其の神に代ふるに尊又は命を以てせられたことは、天忍穗耳尊、

天兒屋根命など枚擧に違がないのである。然るに紀元以後の謂ゆる人皇時代に至つては、其の神字を冠し若くは語尾に附加する代りに、専ら尊若くは命を以てするに至り、又た踐祚即位後の御歴代を天皇と申し奉るやうになつたのであるが、此の天皇は神代に於ける神々の御子孫に坐せる人格的神格者であるから、即ち又た現神と申し奉ることは、文武天皇の即位の宣命にも見えてゐる次第である。されば天皇は人格者たると同時に現代に於ける神であらせられるから、即ち神人一體の活神であらせられる。故に或は神と稱し、或は天皇と申すのは、唯だ紀元以前と紀元以後とに依つて區別せられたる年代的分界に基づく所の用語の差別に過ぎないので、神と現神たる天皇との間に何等實質的の相違はないのである。中世以後に至つては、天皇を又た

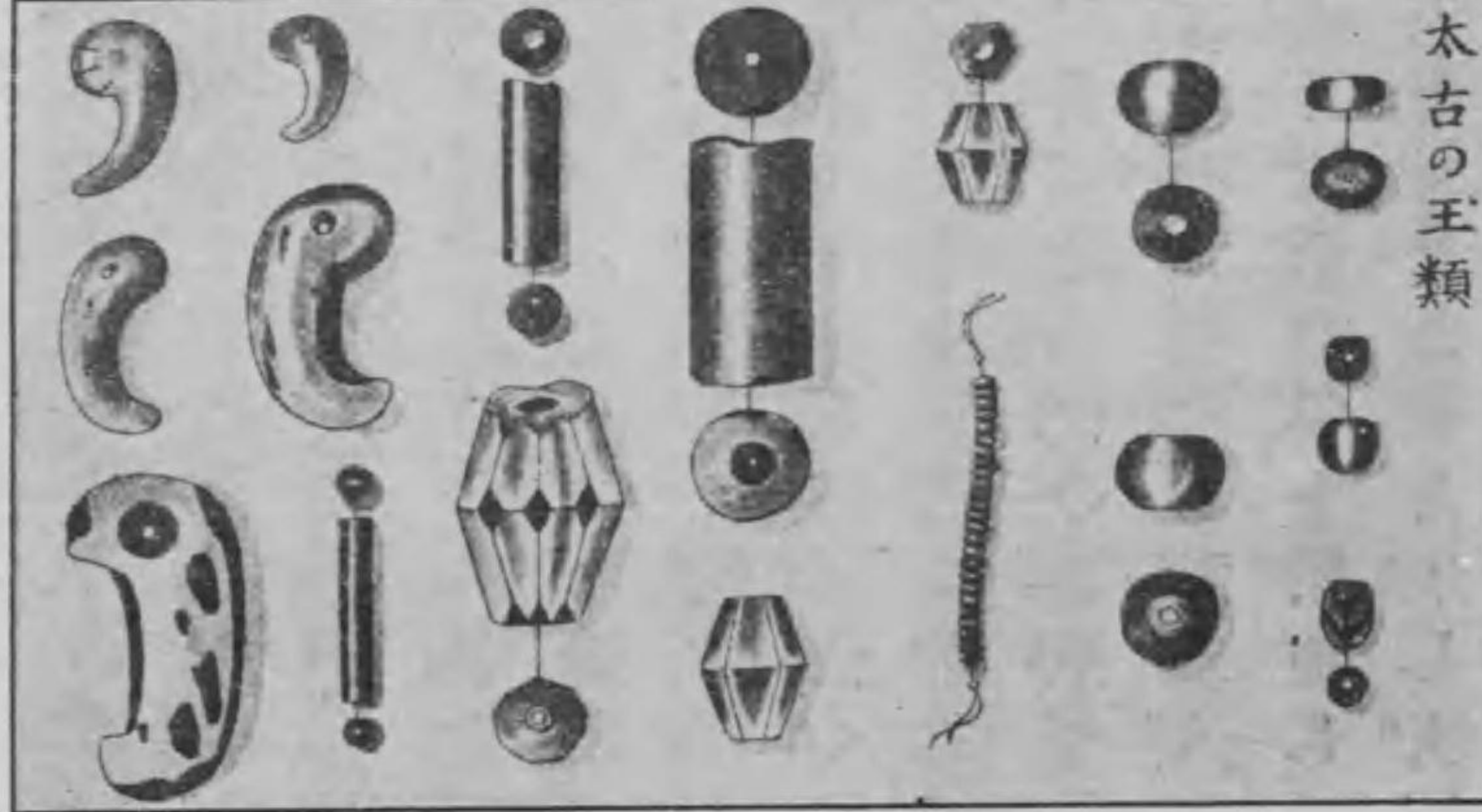
帝と申すやうになつたのであるが、此の帝は御門の義で、其の御門は皇居の禁門である。即ち天皇の尊嚴を畏み、其の御居所に就いて申し奉る尊稱である。されば陛下と申し上げるのも之れと同様の意味であつて、即ち宮殿の階段高く坐します天皇を其の階段の下に畏れ伏す臣下の位地より申し奉るのである。殿下と言ひ、閣下と言ひ、閣下、臺下、貴下などと言ふのも、亦た皆此の意味に於ける敬稱で、唯だ其の間に尊貴の程度の差別がある迄である。

日子及び日女

更に又た神代及び神代以後に於ても、皇子を彦、皇女を姫と申されてゐるが、其の彦は日子で男子の美稱であり、姫は日女で女子の美稱である。即ち天照大神の御名を大日靈貴と申し奉る

其の日靈は即ち日女であらせられる。日本書紀に伊邪那岐神が其の皇子皇女を生み給へる條に「日神を生む、大日靈貴と號く、此の子光華明彩六合の内に照徹すと見えてゐるが、即ち其の明德光華の天日に比ぶべきものがあるから日神と申し上げるのであつて、日女の日は日神の日と同じく光華明彩の意義である。又た木花開耶姫、栲幡千千姫の姫も同じく日女である。更に又た天照大神の皇孫の尊を、古事記には天津日高日子番能邇邇藝命とし、日本紀には天津彦彦火瓊杵尊と記されてあるが、其の彦は即ち日子である。而して其の天津の天は高天原に坐せる天つ神の御子たるの尊稱で、津は助辭である。彦火の火は、日と同語同義の光華秀麗の意味であり、瓊々杵の瓊は天之瓊矛の瓊と同じく、天資の聰明麗美なること眞玉の如くなるを稱し、

太古の玉類



杵は君の義であるから、高天原に坐す聰明俊秀なる男君の神と申すことが即ち天津彦彦火瓊杵尊である。更に少彦名命の彦、天稚彦の彦も亦た皆日子である。要するに日子日女の日は、光華明彩たる天日の日と同義であつて、又た火光燦爛たる火、若くは靈異の「び」と同じく、其の天資の俊秀なるを形容したのである。更に天穗日命の穗も亦た火若くは日と同語で、物の穗尖と言ふやうに俊秀を意味してゐる。其の俊秀の秀を「いづ」と言ふは、即ち又た日

出づ若くは「穗出づ」の轉語であり、毛の秀てたるを髭、明智大徳日の如きものあるを聖人と言ふの「ひ」も亦た皆同語同義である。要するに彦即ち日子、姫即ち日女は、共に靈異俊秀なる皇子皇女の義であるが、後世に至つては庶人の子女までも彦並に姫を濫用するやうになつた。

神格とは何ぞ

以上説き來る所に依つて、神道の神即ち我國の神は、神代にあつては建國創業の祖先で、即ち皇室の御先祖であり、神代以後に於ては歴代の天皇で、其の天皇は現神であらせらるることをも了解した。即ち神は人であつて神格を備へ給ひ、其の御名に尊若くは命の稱を附加し、神の御子を日子又は日女と呼び倣し、天皇を又た帝と申し上げて、並に其の尊嚴を虔仰しつゝあるの

である。然るに何れも皆吾等臣民の君父たる人であらせられて、而かも神格を備へ給へると言ふのは、如何なる意味であるか、更に之を研究せざれば神の神たる所以を明にすることは出來ない。されば其の神格とは何であるかと言ふに、一言にして之を盡せば則ち人にして天地宇宙の大理法と一致せる明智大徳を具備せられ、其の一言一行は皆悉く億兆萬民の行動の標準として示さるる所のものである。故に其の人の形骸は朽ちても、其の大標準は永久に存在してゐる所に神の神たる眞髓があるのである。即ち現神たる天皇は現代に於て其の大標準を示されつゝあるのである。而して天皇は神代に於ける神々の御延長であらせらるるから、其の示さるる大標準は又た神代に於ける神々の示されたる大標準である。

神格の實質

故に神道の神々は、自己の行動を以て他の神々の行動の基本とせられ、且つ後世子孫の行動の標準として示され、斯くて此の大標準に據り子孫をして前代未聞の大功を樹てしむべく希望せらるると同時に、其の大功に對しては非常に満足あらせらるる神々である。即ち大己貴命が裏日本を經營して其の領土を高天原に奉還したる大功に對して、天照大神が非常なる御満足を表せられ、大己貴命の爲めに天日隅宮を新營して其の結構宏壯を極め、供するに百畝の田を以てし、舟遊航海の具として各種の船舶舟艇を與へ、其の功績表彰の記念として高天原なる天安河に架橋し、特に百八十縫の立派なる白楯を賞賜し、且つ天穗日命を其の左右に奉侍せしめて神祇祭祀の事を主らしめられたる

などは即ち其の一例である。此の天日隅宮は即ち出雲國杵築大社の境域であつて、天穗日命の子なる天夷鳥神は出雲の國造の祖であつて、今の千家北島の兩家は其の後裔である。斯う言ふ風に神道の神々は、下萬民を愛重し給ひ、萬民の善事を以て又た自己の善事として満足せらるるのであるから、従つて又た萬民の悪事を以て自己の悪事として悲まれ、善にも悪にも、憂にも喜にも、皆億兆萬民と共にせらるる大慈悲大仁愛の神である。故に苟も一切の他の神を排して自己一人の萬能圓滿完全無缺のみを標榜し、以て其の他を顧みざるが如き獨斷專制絶離隔疎の神では決してないのである。

神の理想的大道

そもく神道の神は、世界に於ける各宗教の信奉する所の神、

若くは其の宗教の教祖とは、神格に於て人格に於て全く異つて
ある。即ち其の人格のみに就て言つても、神道の神は普通の宗
教家若くは哲學家ではなくして、現實なる國政の總攬者である。
又た單に宗教上の教義の唱道者ではなくして、現實なる自己の
行動に依つて不朽の大道を確立し給へる偉人である。之を我國
以外の世界各國に就て見るに、其の文明開化が未だ幼稚で、宗
教、法律、政治、道徳、教育、哲學、其の他一切の事物が混然
として一團を成し、尙ほ未だ各々分立せざる時代に於ては、祭
祀の首長たる宗教の維持者は、同時に國家社會に於ける政治上
の元首として最高權力を有してゐたのであるが、文化の進歩に
伴ひて宗教政治法律道徳の分立發達したる後に於ては、宗教の
維持者たる首長と、政治法律上の元首と分離するの止むを得ざ

るに至つたのである。或は一人にして之を兼併せんことを試み
た者もあるが、何れも皆失敗に終れることは世界各國悉く然ら
ざるはなく、斯くて宗教上の大人格者は全く政治を離れ、専ら
宗教家として各人の宗教心を統合結晶せしめ、政治上の首長は
又た全く宗教を離れて、専ら政治的力量に依つて人心を融合歸
一せしめ、萬民の總攬者として其の國家を建設するに至つたの
であるから、國家の元首と宗教上の首長とは全然別物となつた。
然るに我日本に於ては全く之れと異なり、神道の首長は國家の
元首であつて、此の偉大なる二方面を一人にして總攬し給ふこ
とは、建國の祖神を始めとし、歴代の天皇皆然らざるはなく、
斯くて此の二方面は常に密接の聯絡を有し、密接の調和を保ち、
寧ろ兩者合致して一體を成してゐるから、我日本に於ては世界

各國の如く宗教と政權との軋轢競争なるものがなく、又た此の兩者の對立拮抗專制獨斷に關する惡歴史の跡を留めずして、眞に一心同體の理想的大道を以て萬古に一貫するものは、實に世界に其の比を見ざる所である。

神人一體と神人合一

此の一心同體の理想的大道と言ふものは、即ち祖先たる神と其の神の延長たる子孫とが、永遠に天地と始終して同心一體となり、謂ゆる神人合一の域に到達するを言ふのである。加之先人と後人との一心同體、並に現代に於ける億兆一心の美を濟せるが如き神人の合一も、亦た同じく此の理想的大道に依るのであるから、此の理想的大道は常に先人の言行活動の上に躍出して光輝ある歴史の成跡となり、以て現代人の生活活動の標準基本

となり、更に後人をして繼承實現せしむべきものである。故に祖先たる神は、其の神の延長たる子孫の爲めに絶えず幸福を希望し、從つて其の子孫を加護せらるると同時に、其の子孫の偉大なる功績と向上進歩とに對しては絶大の満足を表せられ、其の子孫の功績に依つて却て己が不完全を補はれたりとせらるる所の高德寛容の神であるから、偕て後世萬人の仰ぎて以て模範とする所以で、洵に善美圓滿完全の神と言はねばならぬ。斯くの如きの神、即ち無形の靈象にあらずして、而かも絶大の人格とを兼有せらるるものは、神道の神の外に果して何れに見られ得るであらうか。彼の故らに人間を惡に陥れて、然る後に吾れ其の惡より救出せしむべし、宜しく有り難く吾に感謝せよと言ふが如き不完全極まる神とは固より同日の論ではないのである。

斯る善美圓滿完全なる神に歸一することは、即ち吾等臣民の本分であるから、吾等の理想は建國の神々並に歴代天皇の示し給へる大標準、即ち遺訓遺績を虔仰して、神人合一の域に到達することにある。併しながら之を建國の神々並に現神たる歴代天皇より見れば、則ち神人の合一ではなくして、神人の一體である。其の合一は歸一であるが、一體なるものは歸一でなくして同一同體である。斯る同一と歸一との差別のあるは、即ち總攬者たる神及び天皇と、被總攬者たる臣民との差別があるに依るのである。

神道の神は多神にして一神なり

併しなから此の神人の歸一は、場合に依つては又た神人の同一たり得ることもある。即ち被總攬者たる吾等臣民と雖も亦た神

たることが出来る。尤も被總攬者にして神たり得るには、各人の自由に任せて直に神たり得るのではなく、皆總攬者たる天皇を通じて始めて神たるの表現を完成せしめらるのであるが、此點に於ても現神たる天皇は、決して自己一人に於て神たることを獨占し給はず、又た決して威力に依つて神たることを保持せらるるのではない。此處が即ち神道の神たる所以、又た神道の神道たる所以であつて、世界無比なる神道の實現は、即ち實に世界無比なる國體を成す所以である。されば吾等臣民にして神人に歸一せる偉大の人格者、若くは國家社會に對する功績者は、其の先人たると後人たるとを問はず神として表現せられたる實例は、先づ之を九段坂上なる靖國神社に於て見る事が出来る。即ち明治十年役の戦死者でも、日清戦役、日露戦役、

若くは最近に於ける日獨戦争に於ても、國家の爲めに忠死したる戦功者は、之を神として祀られてゐるのである。而して其の神は決して無形の靈象ではなく、又た形骸枯骨でもなく、實に千歳の龜鑑として偉勳赫々たる人格的神格者である。故に天滿宮に奉祀せられたる神は、偉大の人格者たる菅原道眞であり、淡川神社に奉祀せられたる神は、我國唯一の忠臣として百世の師表たる楠公其人である。其の他結城神社の結城宗廣、藤島神社の新田義貞、乃木神社の乃木希典など、臣下の列にして神たるものは殆んど枚擧するに遑もないのであつて、神道の神は實に多神と言ふべきである。更に神代に溯つて之を見るに、一として神ならざるはなしと言ふ有様で、中にも八百萬の神の大宗たり億兆景仰の中心本體として基督教の「ゴッド」、佛教の眞如、

梵教の「ブラーマ」、儒教の天の性質を統合融和して存在せらるる至高絶大なる神は即ち天之御中主神である。又た萬物生成の本源たる神には、高皇産靈神及び神皇産靈神の如き産靈即ち生産の神がある。此等の神々の命を受けて此の大八洲の經營に當られたのが、伊邪那岐神及び伊邪那美神である。斯る間に時運の推移と國家組織の進捗とに依り、高天原に坐して天下を統御せらるる天神と、地方を分管して其の開拓の事より民生の化育に至る迄、之を分掌する所の國神とに別れ、中央地方各々其の任務權限の差を生ずるに至つて、多神は益々多神となつたのである。即ち伊豫には愛比賣、讚岐には飯依比古、阿波には大宜都比賣、土佐には建依別、筑紫即ち筑前筑後には白日別、豊國即ち豊前豊後には豊日別、火國即ち肥前肥後には速日別、日向國

即ち今の日向大隅薩摩には豊久士比泥別、壹岐には天比登都柱、對馬には天之狹手依比賣、隱岐には天之忍許呂別の神々が分置せられ、更に港灣を掌る神には速開津日子命及び速開津比賣命があり、船舶の事には衝立船戸神があり、沿海の事には邊津那藝佐毘古神及び奥津那藝佐毘古神があり、山の神には大山祇命、木の神には句句廼馳命、草の神には草野媛、野の神には鹿屋野姫、土の神には磐土命、底土命、赤土命があり、風の神には級長戸邊命、火の神には迦具突智命、農耕食饌の神には倉稻魂命、海運航海の事には筒男神即ち世に謂ゆる住吉大神があつて、其の筒男神の子孫は安曇宿禰又は阿曇連と言つて舟師を統率するの任務を帯べるなど、各々其の分擔權限を異にしつゝ、無數の神々に依つて國務を分掌せられ、而して高天原に坐す天神は之れ

が統御の重任に當つて四方に君臨せられたのである。斯くの如く我國の神は、神代に於ける多數の神々、及び此等神々の延長たる子孫にして氏神及び産土神たるもの、別けても高天原に坐せる天神の御延長たる歴代の天皇即ち現神、並に功績偉勳の顯著なる人々に至る迄、皆悉く神ならざるはなしと言ふ有様であるが、而かも各々其の分擔の範圍を有しつゝ、圓滿性を表現するもあり、生成力を表現するもあり、創設力を表現するもあつて、即ち其の間に調和統括が行はれ、共同融合して、其處に全一體を爲しつゝあるから、其の多神は即ち一神の根據の上に立てる多神であつて、之れが統括關係は一絲も亂れざる圓滿なる秩序を保つてゐる。恰も目は視覺を主り、耳は聽覺、鼻は嗅覺、口は味覺、皮膚は觸覺を主り、四肢筋肉も亦た皆其の分擔權限

を異にしつゝ、而かも共同一致し調和統括を得て、此處に始めて吾等の全一體を作せると同様である。されば吾等の體內を通じて廻ぐる所の血管は、猶ほ多數の神々を通じて一貫する所の神道に比すべきものである。斯の如く神道の神は、一神の根據の上に立てる多神、全一體を爲せる多神であるから、排他的若くは獨占的の一神ではなくして、多神即ち一神、一神即ち多神なる圓滿善美の神格と絶大なる人格とを具備するものである。さればこそ吾等日本人が各自に其の本分を守り、其の職分を尊重し、而かも同心一體、融合一致を實現し來れる三千年の歴史の光輝は、實に此の多神即ち一神たるの神道の實現に外ならぬのである。

耶蘇教に於ける神の概念

吾等は神道の神に就て既に其の概略を知り得たから、更に神道以外の神に就て少しく比較研究を試みて見やうと思ふ。其處で先づ基督教に於ける神の意義を繹ぬるの必要がある。乃ち之を基督教の經典に見るに、道は神なり、萬物之れに由つて造らると言つてある。然らば則ち天地宇宙の大道は神である。又た曰ふ、人を僞とするも神を眞とすべしと。然らば則ち眞理は神である。又た曰ふ、耶蘇は天に往きて神の右に坐せり、即ち耶蘇は神の像なりと。然らば則ち耶蘇は神人合一の域に達したる偉大の人格者である。又た曰ふ、心の清き人は神を見るを得べく、平和を求むる人は神の子と稱せられ、手淨く心潔き者は神の山に登るを得べしと。然らば則ち潔純清淨の心を以てすれば神に接近することが出来る。而して其神は博愛の神であるから、專

ら情を旨としてゐる。此の情を旨とすることは神に於てこそ完全無缺であるが、人に於ては往々理智を離れて愛憎の念に驅らるる虞がある。されば耶蘇教國一般の弊習として、人種の異同に重きを置き、異人種の排斥、排他主義の悪弊に陥るの結果、古來人種上の鬭争に依つて幾度か血を流したことは歴史の證明する所である。近來黃禍論などを歐洲の一角から耳にするのも、即ち同人種の結合、異人種の排斥に外ならぬ。現に目下の歐洲大戰亂の基因も、其の實を糺せば人種上の勢力競争であつて、排他主義自己中心主義から胚胎してゐる。尤も此等の弊害を其の信奉する所の宗教に歸するのは或は酷に過ぎるかも知れぬ。更に進んで耶蘇教の神の本體を見るに、其の聖書には神は己に擬らへて人間を作れりとあるから、一面には又た人間は己に擬

へて神を作れりと言ふことも出来る。即ち耶蘇教の神は人の作つたものである。人の理想の結晶である。而して其の理想は天地宇宙の大自然の法則に合致したものであつても、到底抽象的靈象たるの外、神道の神の如き人格的神格者たり、又た神格的

人格者たるものではないのである。
耶蘇教の神は唯一神にして多神なり

そも、各種の宗教には各種の特質がある。併しなから宗教其れ自身の本質としては、神があり、人があり、理法があつて、神人歸一の信仰と其の修養實踐とを根本要件とせねばならぬ。斯くて神を認め、又た人を認むる以上は、其處に神と人との對立を認むると同時に、又た神と人との分擔の差別をも認めねばならぬ譯である。併し其の對立のみを認めて歸一を度外に置く

時は、其の神は絶對隔離のものとなり、獨占的專制に陥つて他の神を排斥するものとなるから、到底完全圓滿にして普遍無極なる神たることが出来ない。尤も神人の歸一と言ふことは、神人の同一と言ふ意味ではない。若し神人が同一であるならば、神即ち人、人即ち神である。斯の如きは神道の神以外に見られ得ぬものであるから、之を世界一般の宗教より言へば、神と人とは互に對立して、神は神たり、人は人たる上に於て、而かも其の歸一する所に眞正の妙諦があるのである。併しながら之を神道より言へば、神人の歸一は被總攬者たる臣民に於てのみ實現し得ることとて、總攬者たる神代の神々、並に其の神々の御延長たる歴代の天皇即ち現神に於かせられては、神即ち人、人即ち神であつて、神人一體に外ならぬのである。而して此の神人

一體の神に歸一することが、即ち吾等日本臣民の本分で、其處に君父臣子の同心同體たる實を表現し得るのである。斯の如きは到底世界の何れの國に於ても見られざる現象で、我が國體の萬邦無比なる所以は實に此の點に存するのであるが、吾等は神道が宗教であるか無いかと言ふ問題を研究するよりも、神道の神即ち我が日本の神の本質が、世界の各國に於ける神と如何なる相違があるかと云ふことを目的として研究せねばならぬ。乃ち此の意味に於て耶蘇教の神を見るならば、耶蘇教の神は唯一神であり、神道の神は多神であると言へる。併し神道の多神は即ち一神であることは既に述べたのであるが、吾等の觀る所を以てすれば、耶蘇教の唯一神は又た多神であると言はねばならぬ。何となれば耶蘇教に於ては、各人自ら神の子たるの實を現

し、以て天の父たる神の完全を己に期することを理想とし、此の理想に依て現實に神の國を世界の地上に建つべく期待すると共に、種々の儀式に依て心を幽玄の理想に導かうとするのである。故に耶蘇教の神は唯一神で、耶蘇教は唯一神教であるとは言ふものゝ、「イエス、キリスト」を神に歸一したる表現者と認め、又た其の信徒を神の子として神人歸一の域に到達せしむるを理想とする以上は、「イエス」は固より神たるべきと同時に、耶蘇教の信仰者は舉げて皆神たるべき筈であるから、其の名は唯一神たるも、其の實は多神と言はねばならぬ。即ち多神の上に立つて一神たり、一神を基本として多神たる所に、眞に耶蘇教の善美があるのである。然るに「イエス」が贖神罪に問はれて十字架の上に其の生命を犠牲としたるは猶太教徒が此の意味に於ける耶蘇

教の多神を認めなかつたからである。即ち耶蘇教の美點を美點としなかつたからである。若し耶蘇教にして神人の歸一を本旨とせず、各人皆神たり得るの理想境に達し得ざるものとせば、耶蘇教は猶太教と擇ぶ所がなくして、眞正の宗教であると言ひ得ざることに歸着するのである。

猶太教の神と耶蘇教の神との別

然らば「イエス」を贖神罪に問へる猶太教の神は如何なる神であるかと言ふに、其れは絶対に人間世界を超越隔離したる神である。既に人間世界を隔絶したる神であるから、人間世界と密接の關係を有たぬ。従つて人々の信仰の標的たることが出来ない。何となれば神は人々の信仰心に依て觀ぜらるべきものであるのに、絶対に人間と隔絶せるものとせば、之れが信仰の根柢を求むる

に處がなく、斯くて遂に神を觀ずることが出来ないから、即ち神が無いことになるのである。故に絶對的に人間世界から懸隔したる神を認めんとすることは到底不可能と言はねばならぬ。是に於て「イエス、キリスト」は、自ら神の子として斯る超絶的の神と人との思想の融合を可能ならしめ、獨斷的專制なる猶太教の神をして、事實上其の超越的隔絶的から脱せしめたのである。之れが爲めに「イエス」は贖神罪に問はれたのであるが、耶蘇教が猶太教よりも遙に進歩したる所以は實に茲に存するのである。「モーセ」の十誡に「汝、我が面前に於て我の外何物をも神とすべからず」又「我がエホバよ、汝の神は嫉む神なり。故に我を惡む者に向つては、父の罪を子に報ひて數代に及ぼし、我を愛し我が命令を守る者には、恩恵を施して百千代に及ぼすべし」とある

が如き排他的獨占的にして、而かも恩を施して恩とし、愛を與へて愛とし、愛憎偏僻を事とする神は、決して大慈大悲の神ではないのである。此れと比較すれば耶蘇教の神は實に理想的の神であつて、此の神に歸依し、此の神の子たらんことを主眼とし、博愛を以て歸依の最良方法とするのが、即ち耶蘇教の本旨である。

佛教の神

更に轉じて佛教の神は如何なるものであるかを見やうと思ふ。其處で佛教の經典を調べて見るに、「過去現在未來の佛は、十方世界の中に安住し、其の光明は遍照にして、清淨圓滿、慈光を放出す」とある。即ち時間的に無窮に、空間的に無邊に、天地宇宙の大を包有して、限なく慈悲の光明を放射せる清淨圓滿なる

神である。又た如來の威光は諸の大衆を蔽ひ、日初めて出て一切の闇を破るが如く、世尊の毫相は徧く佛刹を照し、猶ほ月の圓滿にして光明の熾盛なるが如く、佛徳圓滿にして、慧光普く照すとある。即ち日月の光明の如く威徳兼ね備はる所の圓滿完全なる神である。又た無量壽佛の威神光明なる、圓光、智光、威光、慈光の光明を具備すとある。即ち智仁勇の眞善美を具備して、而かも圓滿無缺自在の神である。即ち平等無差別、無窮無邊、絶大至高なる威徳の神であつて、此の神に歸依して神人合一し、佛俗歸一することが佛教の本旨である。而して佛と言ひ如來と言ひ菩薩と言ふも、窮極する所は一神であるが、其の普遍性よりして之を觀れば又た多神である。即ち多神の上を立てる一神、一神を基本とせる多神で、單に宗教としては完全

と言はねばならぬ。固より佛と人との對立を認めてゐるが、其の主とする所は兩者の歸一にあるから、之れが對立を從とし、差別ある自我を脱却し、若くは自我を擴大して佛に歸一し、理體に歸一し、眞如に歸一することが本旨である。故に歸依と言ひ解脱と言ふは、畢竟するに神人の合一を期することである。そもく人間が神に歸依する心の要求は即ち宗教の根柢であつて、宗教は人間の本性を神化せしめんが爲めの交渉である。故に神を知ると言ふことは、自己の本性を知ることである。神は外にあるのではなくして人間各自の内心に存在するのであるから、神は人間其の儘の生き寫してなければならぬ。即ち人格の極致は神格でなければならぬ。されば神とは容觀的に自己を抽象したものであるから、神人の歸一とは自己の生き寫しに向つ

て自省し、以て益々自己の本性を發揮することである。其の自己の本性とは即ち天地宇宙の大自然の理法を其の儘に結晶せしめたもので、此の結晶は内界的經驗に依て得たる道德心と、外界的經驗に依て得たる意識とを調和して、宇宙に於ける一切の現象を統一したるものでなければならぬ。即ち斯る調和と統一とに依て得たる自己の本性に向ひ、自己の生活々動を之れに歸一せしむることが宗教であるから、此の點に於て佛教は心佛一體、法性眞如の觀照を明かにしてゐる。尤も宗教は神人歸一の信仰を本旨とするのであるが、此の神人の歸一の爲めには又た人間生活の規範たる法の信仰を基礎とせねばならぬ。而して此の規範たる法は即ち神意であつて、神の神たる所以は其の規則正しき法の創設者たり且つ保持者たる所にある。即ち規則正し

きが故に萬能たり不變不動たり得るので、斯くて吾等も亦た不變不動に神を信仰し、惑はず疑はずして神に信賴し、其處に始めて人間生活の規範たる法の神意を信仰し得るのである。即ち此の神の意思たる法は天地宇宙に磅礴たる大理法であるから、決して偶然のもでもなく、又た間斷あるものでもなく、實に無邊無窮の大道として人間生活の不朽の規範である。故に此の規範に一致することが即ち神人の歸一である。佛教は此の規範に向つて理智を旨として法を説くに勉めてゐるから、情愛を旨として教を立つる耶蘇教とは聊か其の趣きを異にしてゐるが、併し其の神とする所は共に理想的心象たるに於て同一である。

儒教の神

更に儒教の神を繹ぬるの必要を認めねばならぬ。其の神は即ち

天、天帝、又は神明と稱して、廣大無邊、絶對無窮を意味し、其の大は天地と合し、其の徳は日月と等しく、光明靈妙の威徳を具備するものである。易經に曰ふ「大なる哉乾元、萬物資つて始まる。乃ち天を統ぶ、陰陽測らず、之を神と謂ふ」と。即ち神は萬物を創造し、天地を統べ、陰陽を包含する所のものである。孔子曰ふ「變化の道を知る者は其れ神の爲す所を知る乎。庖犧氏始めて八卦を作り、以て神明の徳に通ず。神を窮め化を知るは徳の盛なり」と。即ち神明の徳に通じ其の化を知るは神に歸一するるのである。又た曰ふ「鬼神の徳たるや其れ盛なり。之を視れども見えず、聽けども聽えず」と。即ち神は無形の靈象であつて、神道の神の如く神格的人格者ではない。又た曰ふ「精神其の形を離れて各々其の眞に歸す、之を鬼と言ふ。鬼は歸なり。大にし

て化す、之を聖と言ふ。聖にして知るべからざる之を神と謂ふ」と。然らば即ち神は聖人と雖も知るを得ざるものであつて、眞理に歸一するものは鬼である。其の之を知るを得ずと言ふは、眞に知るを得ざるのではなくして、其の靈妙不可思議の極致を言ふのである。老子曰ふ「神は生の本なり、形は生の具なり。形體消えて神は毀たず、性命既きて神は終らず」と。然らば即ち神は無窮である。管子曰ふ「道の天にあるは日なり、其の人にあるは心なり」と。然らば即ち天人は合一し、心道は一致すべきものである。而かも其の神は天地の精粹を極めたる無形の靈象で、無邊無窮、陰陽を包含し、宇宙を統括する所の大自然そのものであるが、惜むらくは理論理想に止まつて神人一體の實在を示すものではないから、現實を離れて空理に馳する所の缺點を免

れない。若し夫れ禮儀三百、威儀三千と稱するが如き形式上の差別主義に至つては吾等の採らざる所であるが、其の差別は無差別の上に立つ所の差別であるならば、必ずしも深く之を追窮するの要はない。

神儒佛耶の神に關する概括的比較

尤も儒教は道徳を基本として躬行實踐に重きを置き、敢て神怪を語らざるを本旨としてゐるから、之を宗教と言ふことは出来ないにしても、我が日本國民道徳と甚深の關係を有し、國民思想の上に絶大なる影響を與へてゐるから、他の佛耶二教と共に同列として之を論ずるの止むを得ざるものがある。斯くて儒佛耶三教の説く所の神は大同小異であつて、何れも皆理想的心象に外ならぬ。故に「ゴッド」と言ひ、梵天と言ひ、若くは天、天帝、

天命、佛、如來、眞如といつても、信仰の的確なる對象とするには餘りに抽象的であるから、儒教に於ては釋奠を行ひて孔子を禮拜し、佛敎に於ては釋迦を本尊として堂宇の内に安置し、或は觀音、或は不動、或は闍魔等の偶像を示して理智善惡を形體に表し、耶蘇敎に於ては十字架上の「キリスト」の肖像を信奉の對象とするに至つた譯である。されば儒教に於ては神に事ふること神坐すが如しと言つてゐるが、我が日本に於ては神は實に坐すものであつて、「坐す如きもの」ではないのである。即ち神は祖先であり、又た神は人であつて、決して理想的靈象ではない。而かも其の神は、智を宗として法を説く所の佛敎上の大覺を備へ、意を主として道を宣ふる所の儒教の天道を明にし、又た情を旨として教を立つる所の耶蘇敎の博愛の上に立ち、威徳赫々

として日月の明と其の光を争ひ、無邊無極、天地の大と合致する所のものである。さればこそ神道の神は一面には神道の首長であり、一面には國家の元首であつて、此の偉大なる二方面を一人にして總攬し給ひ、自己の一舉手一踏足に至るまで皆悉く萬民生活の大標準として無窮に示し給ふ所の神である。故に神人歸一の精神を表現せらるると同時に、現世に於て其の歸一を實現せしめられつゝあるのである。即ち神人合一、君民一體、億兆一心の美を濟しつゝある所以である。此の點に於て佛教の如きは神人歸一の精神を表現するに於て遺憾なしと言ふべきであるが、其の歸一の精神を現世にあつて如何に實現せしむべきかに關し、神と人との連絡を缺いてゐる。即ち心佛一體、法相眞如の觀照を明にしてゐるとは言へ、其の心佛一體たる所以の

結果を此の現世の上に實現せんが爲めの中心點たる永遠不動の總攬者を缺いてゐる。換言すれば佛教の神は偉大なる理想的心象ではあるが、其の偉大なる理想を國家的に社會的に現實ならしむるの途を缺いてゐるから、理想界に於ては雄大無邊なる佛教々義も、之を實社會に實行する上に於て神と人との事實上の連絡を有つてゐないのである。耶蘇教も亦た其の通りで、猶太教の絶對超越なる神の缺點を除去し、「イエス自ら神の子なりと信じて神人の歸一を耶蘇教義の生命とし、又たイエス自ら信仰界の總攬者となつて萬人を同心一體ならしめんとしたのであるが、其の同心一體の實を現世の生活々動の上に實現せしむるに必要なる永遠不動の總攬者を確定しなかつたから、形而下の統一と形而上の統一との融合を缺き、之れが爲めに現世に於ける

國家社會の總攬者と、信仰界の總攬者たる神との連絡を全からしめなかつたのである。故に耶蘇教國に於ては、國家は教會の下風に立つと共に、屢々宗教と政治との衝突を起すのみならず、又た國家に革命を惹き起して政治上の總攬者を改廢し、之れが爲めに國家の滅亡を招けるもの古來其の例に乏しくないのである。佛敎國も亦た此の弊を免かれざる一例として、佛敎の根源地たる印度が今は既に其の獨立を失つてゐる譯である。斯の如きは國家の總攬者たる神と信仰上の總攬者たる神と隔離しつつある結果に外ならぬ。獨り我が日本に於ては此の兩方面の總攬者たる神は唯だ一人の現神で、即ち歴代の天皇は其の現神であらせらるると共に、神代に於ける神々も其の當時に於ける現神であらせられたから、信仰の上にも、國家の上にも、神人、人

人、皆共に同心一體を實現し、精神的に物質的に將た生理的に、祖先と子孫、先人と後人と、同一精神を繼承し、以て神人融合の實績を永遠に顯揚しつゝあるから、他の諸外國の如き革命なるものは、古往今來並に將來に於ても我國には全く絶無であるのである。

神に關する外來思想の影響

併しながら儒敎及び佛敎は、我が國に輸入以來幾多の年月の間に神道化せられて、或は日本的佛敎となつたのであるが、一面には神道も亦た儒敎及び佛敎の影響を受けたのである。否寧ろ儒敎及び佛敎の長所美點を摘採して、之を神道の發揮の上に善用したのであるが、而かも亦た其の短所をも併せ採れる傾向が無いてもない。即ち形なくして靈あり、其の靈に絶對自在の通

力があつて、加護冥罰禍福を下し、到底人智の測り知るべからざるを神とするの觀念は、儒教傳來以後に於て養はれ、延ひて建國の祖神をも無形の靈象なりと誤解する者あるに至り、斯くて神代の事蹟を目するに神怪不可思議を以てし、更に近代に至りては泰西思想の輸入と共に、益々建國祖神の實在を忘失し、従つて歴代天皇の現神たるの眞義に徹底せざるが爲めに、天皇の御先祖たる當時の現神が此の國家の經營を全ふし給へる天業に對して、恰も泰西の曖昧模糊たる神話と同視し、遂には紀元元年を境界として其れ以前を無形の靈象的時代なりと考へ、祖先の赫々たる偉績に對して呼ぶ所の神代の名を以て、宛然實社會を離れたる空想的若くは假想的時代なるかの如く誤解するの餘り、甚だしきは神武天皇を以て半神半人なりと言ふものさへ

あるに至つた。即ち紀元元年を境として其れ以前の神日本磐余彦尊は無形の靈象たる神であり、即位以後の神武天皇は實際的人格者であると言ふのである。無稽妄誕も亦た甚だしきの至りである。何となれば紀元前一年の神武天皇と紀元後一年の神武天皇と、何處に神たり人たる丈の懸隔があるのであるか。吾等が神と言ふは其の神格を言ふのである。吾等が人と言ふは其の人格を言ふのである。即ち歴代天皇の御先祖たる神代の神々は、人格的、神格者であらせられ、歴代天皇も亦た皆人格的、神格者であらせらるるから、之を神とも現神とも申すのであつて、神代の神々も其の當時に於ける現神であらせられたのである。然るに之を年代に依つて或は神とし、或は人とし、紀元元年の唯だ一年を境として、同一の神武天皇を半神半人たるなどと言ふ

に至つては、我國の神を解せざるの甚だしきも亦た極まれりと
言はねばならぬ。斯の如きは畢竟神を以て無形の靈象たり、神
怪不可思議のものたりとする外來思想の爲めに愆られつゝ神代
なる名稱を解釋するより起る所の妄誕無稽の嚙語たるに過ぎな
いのである。

變化したる神道の神

斯る外來思想の影響は、獨り支那思想若くは泰西思想のみでな
く、實に印度思想たる佛教の影響を受くることが最も甚だしか
つたのである。故に一面には佛教と混淆したる一種變態の神道
が現出することゝなり、又た一面には神道を加味したる變態佛
教の現出となり、神は佛法を擁護する番神、若くは神は佛の權
化であるとする所の本地垂迹説などが唱へられ、到る處盛んに

神宮寺の建設となり、謂ゆる兩部神道なるものが發生するに至
り、或は神佛習合説、或は兩部習合神道、或は唯一神道、或は
垂加神道と言へるが如き變態神道が續出し、遂に卜部家神道な
る一家の神道さへも生じ、其の神道は佛教を加味して、神道灌
頂、神道護摩、神道加持などを行ひ、而かも全國の神官は滔々
として之れに歸趨するの奇觀を呈したのである。此時に當つて
神道の神は全く變じて無形の靈象となり、國家の總攬者たる神
と信仰上の總攬者たる神とは全然區別せらるゝに至つたのであ
る。斯くては國民思想上に由々しき變革を來さんことを憂へて、
茲に復古神道を唱へたのが本居宣長、平田篤胤等の國學者であ
つて、極力其の當時の迷信を排斥し、儒教及び佛教より神道を
分離するに努めたのであるが、未だ國民一般に及ぼせる影響の

甚大ならざりし憾を免れなかつたのは、其の外來思想の浸染深くして、多年の痼疾が一朝に治癒し得られざるの致す所であつた。然るに近時に至つて世俗の謂ゆる神道なる黒住、天理、大成、御嶽、金光等の教派が頻りに起つて來たのであるが、皆其の信仰の本源を神代に於ける天神に採つてゐるから、外觀は如何にも古神道に基づけるが如く見えてゐても、其の天神を無形の靈象とし、若くは理想的心靈とし、古神道の神即ち我國の神たる所以の根本義を逸してゐるから、教義の大本は明確でなく、之を宗教としても偏狭の嫌があり、且つ動もすれば迷信に陥らしめんとするの傾向があつて、佛耶二教の各派に對抗しつゝ、僅に宗教上の一隅に占據するの有様は、之を廣大無邊なる古神道より見て洵に憐むべきの至りと言はねばならぬ。尤も其の神を

以て無形の靈象なりと解釋するの結果は、神人歸一の爲めの實際的人格者がないから、假令八百萬の神々を奉齋しつゝあつても、其の實は教祖と稱する翁媪を以て神と人との連絡者と爲し、専ら此の翁媪を尊崇するの止むを得ざることは、恰も耶蘇教に於ける「イエス、キリスト」、佛教に於ける釋迦如來の如きものもあつて、而かも似て大に非なるを見るのである。斯の如きは却て廣大無邊なる神道の本義を没却するものであるから、絶大無限の感化を國民一般に布くことは出來ないのである。されば世の有識者は宜しく神道の神の本質に鑑み、外來思想の悪影響より脱して、萬古に赫灼たる國史の光輝と、天地と終始せる國體の精髓とを益々發揚すべく心懸けねばならぬのである。

三 神の活動の卷

高天原は天神の坐せる皇居の地で、即ち大權發動の中心地たることは既に之を述べたのであるが、地方には又た國神を分置して之を管治せしめ、斯くて日本國家の經營を全うせられ、其の大猷宏謨は更に海外にまで及んだのである。而して此等の神々は歴代天皇の御先祖であらせられ、又た吾等臣民の大祖であつて、決して無形の靈象でもなければ、或は理想的假設的の者でもないことを知つた以上は、更に此等の神々の活動振りを虔仰して、以て今日の盛世ある所以の神道の本源を繹ねばならぬ。即ち之を繹ぬるに當つて先づ其の雄大崇高なる神の思想より説

神の思想の雄大崇高なる大自然

き起すが順序であらうと思ふ。其處で此の天地剖判の古傳に就て觀るに、「天地未だ剖れず、陰陽未だ整はずして、元氣渾沌たるの時、其の溟滓れる狀は喩へば卵子の如く、而かも其の間自から萬物發生の萌芽を含み、既にして清濁輕重又た相分れ、遂に清くして輕きものは騰つて天と爲り、濁つて重きものは凝つて地と爲り、斯くて天先づ成り、地後に定まり、而して神聖其の中に生ると言つてある。即ち天地の剖判、世界の出現、人類の發生を擧げて、之を宇宙の大自然力に委する所、洵に雄大崇高の思想と言はねばならぬ。故に或は怪力亂神を語り、或は天帝造物主を拉し來つて、僅に天地の創造を説くものに比ぶれば、其の差は宵壤も啻ならぬのである。即ち日本民族の特性が遙に世界の各國民に超絶する所以の根源は、既に此の雄大崇高なる

大自然觀に於て徵證することが出来る。然るに人或は此の思想を以て、淮南子若くは三五曆記などの支那典籍より拉出し來れるものなりと言ふものもあるが、併し徐ろに本邦の古代思想を観察し、且つ詳に神代の事蹟を尋ねたならば、世界に卓絶せる神性の發揮が、天地自然の幽玄と合致するを見るであらう。然らば則ち天地剖判の自然觀のみを支那典籍中より拉出し來れりとするは餘りに偏狹の議論たるを免れないのである。假令其の文字を假用したればとて、直に其の思想をも併せ採れりとは速斷することが出来ない。或は偶々彼我の思想の符合するものがあつたが爲めに、文字のなかりし我國に於ては、其の思想を表明する爲めの便宜上より支那文字を假用するの止むを得なかつたことは認めねばならぬ。翻つて之を思ふに、斯る崇高雄大な

る大自然觀は、却て早く我が建國祖神の思想に存し、然る後ち支那に輸入したものであるまいか。唯だ支那には文字があり、我が日本には文字がなかつたから、此の思想を文字の上に現はした事に於ては支那が先きてあつたと言ふ迄に過ぎないのではあるまいか。其の實證として支那の歴史が毫も此の思想に伴はざるに反し、我國の歴史が一事一物に至る迄皆悉く此の思想に伴ひつゝ發達したるを證明するのみならず、既に己に開闢建國の當初よりして事實の上に表明せられてゐる。即ち祖神の獨化と言ふことは又た此の大自然觀に外ならぬのである。

獨化の三神

之を古傳に見るに、「天地の初めて發ける時、天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の三神、高天原に成り坐し、皆獨り神

成り坐して身を隠し給ひき、之を獨化三神と言ふとある。此の「獨り神成り坐す」の一語は甚だ簡短であるが、其の意味極めて深長で、克く宇宙の幽玄廣大を説き、天地人生の自然の理を窮め盡して餘蘊なく、後世の學者が縷々千萬言を費すにも優れるものあるを見るであらう。

造化の神

而して此の獨化の三神を又た造化の神とも言つてある。即ち我が帝國は此の三神に依つて造化せられ、建設化育せられたのであるから、別に天帝造物主なる者の抽象的靈象を認識して一切の神怪を之れに歸せしむるが如き空想に馳するを要せず、専ら現實に因つて天地人生を直觀し、此等建國の祖神に歸一して一心同體たる所に神道の精華を發揚し得るのである。即ち歷代天

皇の大宗たる此等獨化の三神は、又た實に吾等日本民族の高祖たる造化の三神であつて、中にも天之御中主神は、其の神の御名の示さるる如く一天萬乘の主宰として此の國家の創建者に在しませば、又た八百萬の神々の首神として億兆景仰の中心本體である。而して高御產巢日神及び神產巢日神の「產巢日」は、一に又た「產靈」に作られ、其の產靈は「結ぶ」「即ち生産」「結合」「一致若くは成功」を意味するもので、神道の本源は實に茲に存し、萬邦無比の國體は又た實に茲に始まるのである。即ち此の二柱は天之御中主神を中心本體として、萬物生成經營造化の天業を大成せらるべく出現し給ひ、其の神性の生産的將た結合的なるよりして、毫も敢て酷虐殘戕の跡を留めず、一に平和の間に無限の福祉を期待しつゝ、偏に仁慈化育統一一致を旨とせられたる廣大

無邊の神慮と天業とは、即ち他日世界無比の國家を形成せられたる所以である。

別天神五柱の獨化

更に古傳を見るに國稚く浮脂の如くにして海月なす漂へるの時、葦牙の如く萌え騰る物より宇麻志阿斯訶備比古遲神生り坐し、次に天之常立神成り坐せり。亦た皆獨り神成り坐して身を隠し給ひきとある。即ち造化の三神と共に之を別天神五柱と言ふのであるが、國家の組織尙ほ未だ確立せず、國土の領域も尙ほ未だ定まらざるの時、其の混沌たる状態は宛然國稚く浮脂の如く、又た筋骨のなき海月の漂動するに然も似たるものであつたであらう。されば宇麻志阿斯訶備比古遲神が葦牙の如く萌え騰る物より生り坐せると言ふは、即ち開闢の當初に於ける創始時代の

實狀を證明するもので、又た日本民族發生の起源とも見られ得るのである。而して其の宇麻志と言ふは即ち善美の神たるを讃稱し、其の比古遲は日子翁の約言で、翁は長老の稱、日子は神の御子の男稱たる彦である。其の阿斯訶備は即ち葦牙で、草味の世未だ開拓耕作するに違なく、而かも四方環海の島國であるから、蘆葦叢茂の間に自から其の居を成せるを見るべく、

葦原中國の名稱

葦原中國の名稱は夙く開闢の當初に於て其の由來を窺ふことが出来る。後世に至つても尙ほ攝津和泉の沿海を或は難波津の蘆と言ひ、又た茅沼の海とも稱し、或は難波の蘆は伊勢の濱荻なると言つて、濱海には所々に蘆荻の名を存してゐるのである。

中央地方分掌の本源

斯くて時運の推移と時勢の進歩とは、何時までも草味の世たらしめず、國家の經營は次第に其の緒に就くに至つて、別天神に次ぐに更に國常立神及び豐雲野神がある。其の國常立神とは天の常立神に對する稱號で、常立とは常住不動を意味し、萬代不變の國家を組織せらるべき大任を帯びさせ給ふを言ふのであるが、其の一を天之常立と言ふは、即ち高天原に坐して統治の大權を掌り、以て四方に君臨せらるべきを表明し、他の一を國常立と言ふは、地方開拓の事より、民生の化育綏撫に至るまで、總て國土の經營に關して其の宏謨を運らし給ふを意味するのである。是れ即ち天神と地祇との依て別るる本源で、又た中央と地方と其の任を分ち、天業漸く簡より繁に入らんとする過渡時代たるを察知することが出来る。而して豐雲野神の名は、祥雲

鬩として國家の瑞運を示すと同時に、豐榮昇る朝日、八雲起つ、豐旗雲と言ふやうに、現實の事相を美化して、其の神性の優美と神徳の盛大とを表昭するのである。

男女耦生の神

斯くて時勢の進歩と共に從來男神のみであつたのが、爾來男女耦生の神を出現することになつて、宇比遲邇、須比知邇、角杙、活杙、意富斗能地、大斗乃辨、游母陀琉、阿夜訶志古泥、伊邪那岐、伊邪那美の十神五代となり、國常立神より茲に至る迄を世に天神七代と唱へてゐる。併し之れは別天神五柱に對する後世の假稱で、特に此の時代のみを天神七代と唱ふるの必要はないのであるから、此の假稱には何等の重きを置くに足らないのであつて、此の後とても天神は世々相承けて高天原に坐し、益

々天下の經綸に當らせ給ふたのであるが、古史の傳ふる所に據れば、事實上此の國家を經營組織せられたのが即ち伊邪那岐、伊邪那美の二神である。

伊邪那岐、伊邪那美二神の英邁

此の二神は最も俊秀英邁に互らせられたると共に、時運の發展は恰も此の二神をして大八洲の綏服に従事せしめらるることとなつたのであるが、俊秀英邁の神性は其の御名に依つても亦た窺はれる次第で、即ち伊邪は「勇む」の約言で、「岐」は君、「美」は女、「那」は助辭であるから、伊邪那岐神は勇ましき男神、伊邪那美神は勇ましき女神と言ふ意味である。さればこそ天業の經營が此の二神に依つて其の緒に就き給ひし所以も亦た偶然ではあるまいと思はれる。

本邦先住蠻人の状態

此の時に當つて我が日本の國土には、建國の神々の外如何なる人種も棲息してゐなかつたかと言ふに決して左様ではない。其處には既に先住の野蠻人が蔓延してゐたのである。其の野蠻人とは何と言ふ者であるかと言ふも犴猛の蠻人で、地宜に依りて穴居し、或は櫟棲し、父子の別なく、兄弟の友なく、又た長幼の序もなく、男は黥面文身し、



アイヌの女

女は丹朱を以て扮身し、皆徒跣にして蹲踞を禮とし、飲食するに手を以てし、酒を嗜みて歌舞宴樂を好み、日常の用具と言へば概ね武器若くは獵具であつて、而かも専ら石器である。其の石斧及び石鏃には磨製もあり打製もあり、此の外石錐、石匙、石臼、石劍、石錘、石矛、或は木弓、竹箭、骨鏃、若くは土製角製の器具もある。而して其の性極めて強悍で、異種族に對しては特に其の獍猛を發揮し、出ては平野に劫掠を事とし、入つては山谷の間に潜伏し、神出鬼没殆んど端倪すべからざるものがある。而して此等蠻人の使用したる石器の遺物が、西は九州より東は北海道に至る迄、苟も本邦の各地に於て發見せらるる物を綜合比較するに、其の製作年代に多少の相違があり、又た其の構造に大同小異があつても、其の系統と種類の同一なる

に鑑みれば、或は蝦夷と言ひ熊襲と言ひ、土蜘蛛と言ひ、若くは或一説の如く格魯謨溝婁人種なるものがあつたにしても、何れも皆同祖同種族の蠻人たりしを想察し得られるのである。假令其れが同一種族でないとしても、少くとも同一程度の蒙昧未開の原始的人種であつた事は確實である。斯る蠻人が全國到る所に播衍分布し、固より未だ家屋建築の法も知らず、又た農耕機織の道も知らずして、原野は自然の儘の叢莽に委せられ、海岸には蘆荻の繁茂するあつて、實に葦原中國の名に背かざる渾沌蒙昧の原始状態を脱せざるの時に當り、建國祖神の一族が海を渡つて此の土に臨まれたのであるから、當時既に金銀銅鐵の器具を使用せられたる程の進歩の域にあらせられたる神々より之を見れば、如何にも古傳にあるが如く國稚く土稚くして海月

なす漂へる時代であつたであらうと思はれる。斯る場所に於て此の國家の經營を肇められたのであるから、其の經營の根據を何れの地に定め、又た何れの地よりして之れが開拓と化育とに着手すべきかに就ては、祖神の俊秀英邁を以てしても、尙ほ且つ神慮を勞せられたるものと見えて、古傳には又た之を「浮雲の根係りなきが如し」と言つてある。洵に咀嚼玩味すべき言葉であつて、其の當時の狀況を宛然目撃するが如き感を與へられるのである。

國家組織の大命下る

此に於て天神は伊邪那岐、伊邪那美の二神に、「宜しく此の漂へる國を造り固めよ」と詔して、授くるに天瓊矛を以てせられたのである。斯くて二神は先づ天浮橋に立ちて其の造り固むべき國



や何處と覓め給ひ、天瓊矛を滄海中に下して畫き探れば、其の矛尖より滴り落つる潮水が自から凝つて一島を成したのが游能碁呂島であると傳へられてある。要するに潮水の一滴が凝つて成れる程の小島たるは勿論で、或は之を今の淡路島であらうと言ひ、又は淡路島に屬する沖島であらうとも言はれてあるが、兎にも角にも攝泉の近海中に於ける小島たるには相違なく、其の天浮橋は潮水滄海等の言葉と關聯して船舶の事を言つたものであらうと想察せ

られる。其處で二神は游能碁呂島に天降り坐して天下經營の根據を此處に定め給ひ、

國家組織の本源

乃ち天御柱を立て、八尋殿を造り、共に殿中であつて徐ろに大猷を定められたのであるが、是れぞ國家組織の本源で、其の天御柱は國維の大本、八尋殿は家族制度の起源である。偕ても此の八尋殿は宮殿建築の古傳に見ゆる始めてあるが、之を以ても亦た建國の祖神は穴居巢栖の蠻人でなかつた事が證明せられる。而して其の八尋と言ふは廣壯の意味であつて、「八」は「彌」の略言であるから必ずしも八個の數を限定したのではない。即ち八百萬神、八十氏伴、八雲起つ、大八洲、千代八千代、八岐大蛇、天之八衢、八雷神、八咫鏡、八坂瓊曲玉、七重八重、八十帥、八

千矛、八十綱打ち掛けてなどと言へる「八」と同じく「彌」即ち多數の意味である。要するに天下經綸の神籌は先づ此の八尋殿の中に運らされ、萬世の皇基は早く此時に於て其の端緒を開かれたるものと言つて然るべきであらう。

大八洲の循服

斯くて八尋殿に神籌を運らされたる二神は、乃ち先づ大日本豊秋津洲を循服せられたのである。

大日本豊秋津洲

此大日本の名は今の大和より始まつて豊秋津洲に冠し、遂に帝國の總稱となるに至つたのであるが、當時に於ては専ら後世の畿内及び近畿地方並に山陽道方面を指したるものゝやうに思はれる。或は今の本島全部であると言ふ者もあるが、是より以後

に於ける裏日本の經營、並に東海東山の尙ほ未だ化外たりしに見て、事實上本島全部とは言ふことが出来ない。而かも地形の蜻蛉に似たるものがあるから秋津洲の稱ありと説く者もあり、或は秋津の津は助辭のつて、其の秋は秋穫豊穰の稱であると言ふ者もあるが、假令其れにしても伊邪那岐神の時代に、既に本島の地形が蜻蛉に似たりとせらるる程迄に測量上若くは地圖上の進歩があつたものとも思へず、又た秋穫の豊穰なるには相違ないとしても、國家の組織尙ほ未だ成らずして僅に之れが經營に着手せられたる當初に於て、早く既に五穀豊穰に基ける國名ありしとも思へず、従つて此等の解釋は時勢の稍進歩したる後に於て下されたるものと考へねばならぬ。此の點よりして若し實に大日本豊秋津洲の名が伊邪那岐神の時代に於て既に存在せ

られたりとせば、蜻蛉洲若くは秋穫豊穰の意味の解釋は妥當なりとは言へないから、吾等は更に其の解釋を他方面に向けねばならぬ。尤も日本若くは大和と言へるは、山迹又は山門の意味で、青山四周の間に平野を占めたる今の大和國を指すことは、神代に於ける高天原、殊に皇孫瓊杵尊の日向降臨以前の高天原、並に神武天皇以後桓武天皇に至る迄一千餘年間の皇都が、殆んど總べて大和國內であつたことに依つても亦た明白なる事實であるから、其の「やまと」は遂に全國の總稱となり、或は大和或は倭、或は日本の文字を當て、而かも尙ほ「やまと」と訓ずるに至つた事は疑ふべくもないのであるが、伊邪那岐神の時代に於ては、「やまと」の名が未だ全國の總稱とはならなかつたから、即ち今の大和並に其の附近のみの名稱として用ひられたものに

相違あるまいと思はれる。然らば豊秋津洲とは如何なる意味であるかと言ふに、豊は美稱たること勿論で、秋津は開津ではあるまいか。其の「洲」と言へるに鑑みて津とあることの最も緊切なるを思へば、津は決して助辭のつてはないのである。即ち港灣要津を掌る所の神に速開津彦命並に速開津姫命のあるのを見て、秋津は開津、秋津洲とは良港要津に富める島國と言ふの意味に外ならぬと考へられる。斯くて豊秋津洲は遂に全國の總稱となるに至つたのであるが、伊邪那岐神の時代に於ては、其の國家組織の順序並に經營循服の地域より見て、此の名稱が近畿の沿海、若くは瀬戸内海を抱ける山陽道方面にまで擴大されることを最極とせねばならぬと思ふ。即ち大日本豊秋津洲の名稱は、其の初に於ては今の大和及び其の附近の沿海地方のみを限り、

後世に至つて全國の總稱となつたものと考へられるのである。

其他の地方の循服

斯くて伊邪那岐、伊邪那美の二神は、先づ大日本豊秋津洲を循服せられたる後、伊豫二名洲即ち今の四國、筑紫洲即ち今の九州、伊伎洲即ち今の壹岐、津洲即ち對馬、隱岐洲、佐渡洲、及び越洲即ち今の加越能方面を循服せられ、更に海路より轉じて瀬戸内海に向ひ、馬關海峡を東に入つて先づ姫島、次に周防の大島、備前の吉備子洲即ち今の兒島半島、並に小豆島を循服し、皆各々之れが管治の神々を分置せられて、茲に國家組織の天業を全うし給ふたのであるが、即ち此等の島々を大八洲と言ふのである。此の大八洲の中で今の九洲を筑紫洲と呼ばれたのは、筑紫即ち「盡」して、本邦の西極端に位するからである。而して對

馬即ち津洲は、日韓交通の要路に當つて、大古既に船舶來往の要津であつた事が知られる。其の隱岐洲は即ち沖の島で、海中の孤島たるを稱し、越洲は今の北海道方面であつて、亞細亞大陸の東北部との往來は此の地方よりするを常としたから、即ち「越」又は「高志」の稱があるのであるが、要するに大八洲の循服は重きを日本海方面に置かれたのを以ても、亦た韓國及び韓國以外、の亞細亞大陸との關係の淺からざりしを窺知するに足ると思ふ。

東海東山の化外

然るに此の二神の經營循服が、専ら大和以西並に北陸方面に及びながら、毫も大和以東即ち東海東山方面に及ばなかつたのは何う云ふ譯であらうかと言ふに、當時此の方面は後世の謂ゆる蝦夷の巢窟で、彼の石器を使用せる原始時代の蠻人が、恰も

今日の臺灣生蕃の如く容易く皇化に浴せざるものがあつたからであらうと思はれる。固より建國祖神の英邁優秀を以てして、一舉に之を討勦することは敢て難事てなかつたには相違ないが、専ら徳化を旨とせられたる神々であるから、唯一時の功を争ひて殘虐を行はせらるるを好ませられざると同時に、既に循服せられたる大和以西の地方に於ける今後の開拓經營を全うする上に要すべき力の莫大なるものがあるから、今に於て全力を東海東山方面に注ぐの若かく急なるを要せざりしが爲めに、斯くは暫く化外として他日の化育に待たれたものであらうと思はれる。されば祖神の經營が大和及び大和以西に専て、殊に其の全力を九州方面に注がれたのであるから、偕てこそ日本の文化は西に始まつて東に及んだものであるとの説さへ唱へ出さるるに至つ

た譯であるが、併し事實上の文化の發源地及び中心地は、其の初め大和の高天原であつて、次に日向に移り、神武天皇以來再び大和に復歸することになつたのである。

諸神の國事分掌

斯くて大八洲の經營が其の緒に就くと同時に、伊邪那岐、伊邪那美之二神は、更に國事の分掌を八百萬の神々に命じ給ひ、山を掌るもの、川を掌るもの、港灣を掌るもの、船舶を掌るもの、農事を掌るものなど、それ〴〵職務を分擔することになつた。従つて其の職務より由來する所の神の名が始まつたのである。

職務より由來せる神の名稱

例へば海事を掌る神に鹽土老翁があり、土神に磐土命があり、食饌の神に保食命があり、航海舟師を掌る神に少童命があり、

港津海運を掌る神に筒男命があると言ふやうな次第である。即ち鹽土老翁の鹽土は鹽津持の約言で、其の鹽津持は海灣港津の事を擔任するの義である。又た少童命は一に綿津見命に作られてゐるが、其の綿津見は即ち海持で、海事を總管し海人を主宰するの稱である。即ち其の子孫は後世に至つて阿曇連と稱して我國の舟師を統率してゐる。又た筒男命の筒男は津々男であつて、即ち港津海運の事を掌るの稱である。此の少童命と筒男命とは異名同神なりとの説もあるが、开は兎も角も神武天皇の東征に際して水師として功勞のあつたのは、此の少童命の子孫であり、神功皇后の三韓征伐に當つて舟師を統率して偉勳を樹てたのは、此の筒男尊の子孫であつた。故に神功皇后は其の功績を表昭せんが爲めに、筑前、長門、及び攝津に、之れが祖先た

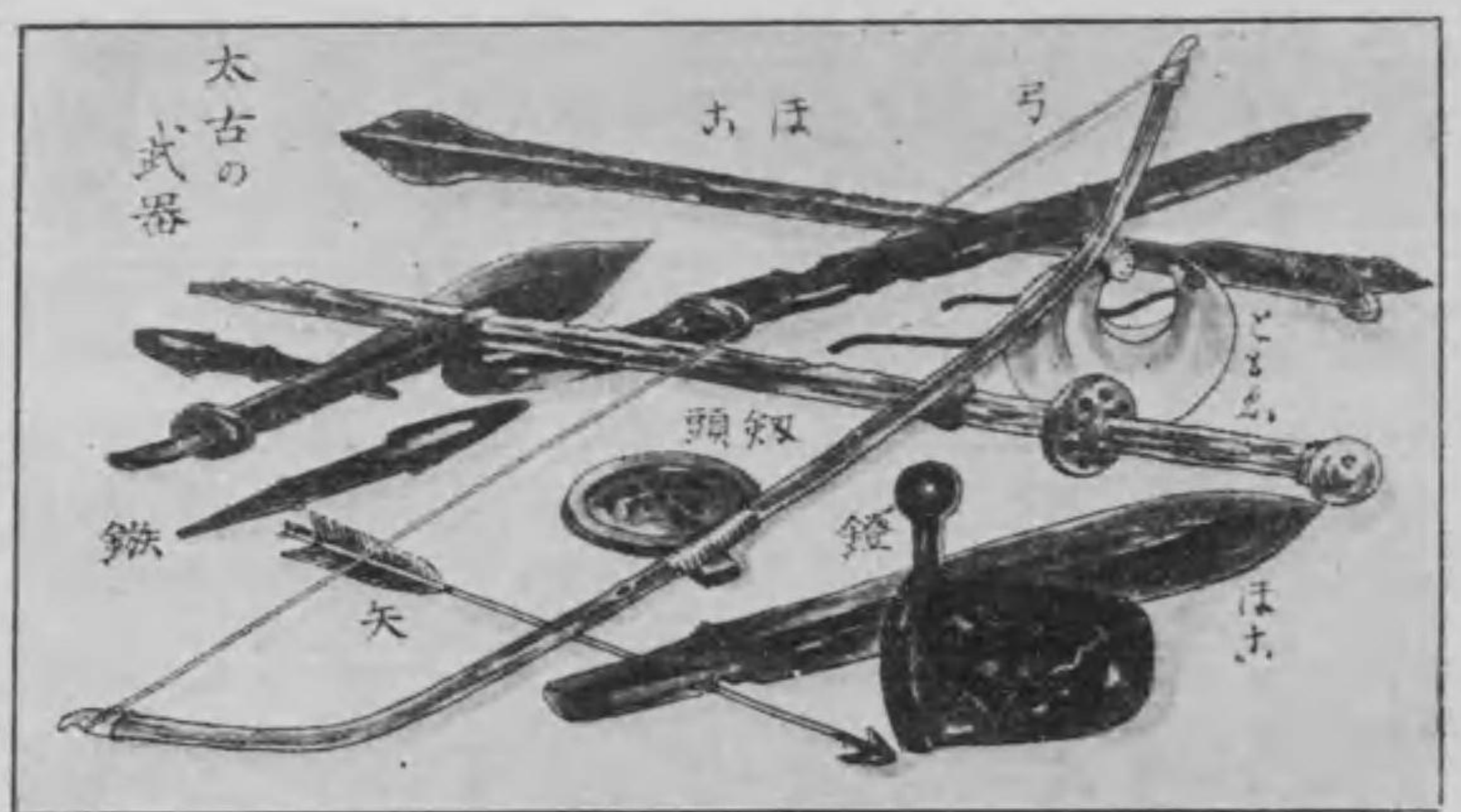
る筒男命を奉祀せられたのが、即ち世に有名なる住吉大神である。

黄泉軍の顛末

伊邪那岐、伊邪那美の二神が、斯の如く諸神の分掌を定められたる後、更に經營の歩を進めて大猷宏謨を永遠に確立せられんが爲め、遠く海外をも綏撫し給はんとし、之れが地理的必要の上から、大和の高天原を出て新に内外經營の本據を他に移さるるに臨み、端なくも二神の間に神慮の異なるものがあつて、其の結果は遂に黄泉軍を惹き起すことになつた。即ち重きを韓國の經營に置き、殊に北部亞細亞に向つて皇謨を伸張せられんが爲めに、先づ裏日本の發展を期すべく出雲伯耆地方を政令の中心地たらしむべしとは、伊邪那美神の神慮なるものの如く、

更に南部亞細亞並に南洋方面に向つて皇謨の伸張を圖らんが爲めに、重きを九州の發展に置きて、其の南部の日向地方を政令の中心とすべしとは、伊邪那岐神の大猷なりしものゝ如く、二神の議遂に相容れずして、伊邪那美神は獨り自から黄泉國に赴かれたのである。其の黄泉國は一に根國又は夜見國と言つて、今の石見、出雲、伯耆地方の別稱であるが、當時此の地方は高天原に坐せる天神とは全く別人種なる異族の巢窟であつたから、天神よりして之を見れば、其の人種も劣等で、従つて其の土地も穢はしく感ぜられたるに相違はない。されば間もなく伊邪那岐神が伊邪那美神の後を追ひて黄泉國に入らせ給ふや、其處には八雷神及び黄泉醜女など居列びて、惡臭紛々として鼻を衝き、一面の蛆虫其の邊りに群生するの狀、醜穢見るに堪へざるもの

があるので、伊邪那岐神は寸時も居溜り兼ね、直に逃げ出されたのであつた。其れと氣附かれたる伊邪那美神は、先づ黄泉醜女を遣して引き留め参らせたのであるが、伊邪那岐神は袖振り放つて逃げ給ひ、僅に危急を脱したる間もあらせず、續いて彼の忌むべく畏るべき八雷神が、許多の黄泉軍を率ゐて追撃し來れるものから、今は絶體絶命、尋常一様の手段にては此の兵力に對抗せらるべくもないので、己むを得ず十握劍を抜き放ちて、且つ防ぎ、且つ走り、漸く黄泉平坂まで落ち延び給ふたのである。此の黄泉平坂は今の出雲國伊賦夜坂、即ち意宇郡楫屋村の南部て出雲風土記に見ゆる伊布夜社、即ち延喜式神名帳に見ゆる楫夜神社の所在地附近であるが、恰も此の黄泉平坂の坂本にありたる桃子三箇を取つて投げ付け給へば、左しも標悍なる黄



泉軍も之れが爲めに潰亂敗走すに至つた。其處で伊邪那岐神は此の桃子の偉功を嘉賞し給ひ、之れに告げて白さるるには、後年若し此の葦原中國に有りと有らゆる美はしき青人草の憂き瀨に苦まん時、汝今朕を助けたるが如く又た青人草を助けよとて、此の桃子に意富加牟豆美命と言へる名を授け給ふたのである。即ち其の名の意富は大加牟は神、豆美は稜威積で、武勇壯烈戦功赫赫たるを稱へられたもので、意宇郡名は此の神の名の意富より初つた

のである。

二神の絶縁と伊邪那美神の崩御

斯くて黄泉軍の敗れ還るや、伊邪那美神は今之れ迄なりとて、遂に自から黄泉平坂に出向はれて見れば、此はそも如何に其の平坂の中央には千人引の大磐石が立ち塞つて、又た如何とも爲ん術なきまゝに、空しく其の磐石を隔て、伊邪那岐神と相對し、吾が夫の君、斯く爲し給はゞ、吾は御身の國の青人草を日毎に千人づつ縊り殺さんとて怨み宣ひければ、伊邪那岐神は之に答へて、吾が妹の君、然か爲し給はゞ、吾は日毎に千五百人づつを生むべし。爾後此の磐石より内には來給ふなかれと宣ひつゝ、其の杖を投げ遣りて此處に御夫婦絶縁の誓を立てられたのである。即ち千人の死亡率に對して千五百人の出産率がある譯であ

るが、現今に於ても果して此の率に準じつゝあるか否かは、宜しく其の筋の調査に待つことにして、神代の當時に於ても人口の増加の盛なりしことは之を以ても亦た窺ひ知られるのである。而して其の平坂に立ち塞がりたる千人引の大磐石は、即ち道反大神一に塞座黄泉戸大神、又は單に塞神或は岐神、若くは布那止之神と稱せられ、道饗祭の祝詞に見ゆる八衢比古及び八衢比賣は即ち此の神である。左る程に伊邪那美神は黄泉國に崩御あらせられて、出雲と伯耆の國境なる比婆山に葬られ給ふたのである。出雲風土記には能義郡母理郷に比波村があつて、其の比婆山は今俗にたわの内と呼ばるる所であらうと言ふことである。此の後素戔嗚尊が其の居を出雲に定めて、更に韓半島の經營に當り、大己貴命が専ら裏日本の鎮綏に従事せられ、遂に稻氷命

に至つて新羅の始祖とならせられたるなどは、何れも皆伊邪那美神の遺志を奉じて、其の遺業を恢弘せられたるに外ならぬ。されば日韓併合の事實は、既に神代に於て存在せるものと言つても決して誣妄てはないのである。

伊邪那岐神の西下

既に黄泉軍を撃退して黄泉國より逃げ出て給へる伊邪那岐神は、吾れ實に穢き國に往きてありけり、仍て今より身の禊して清め、稜はんと宣ひて、將に筑紫の日向に降り給はんとするに臨み、恰も伊邪那美神の崩去の報に接し給ひ、慟哭悲歎の餘り涙滂沱として禁じ難く、其の涙より天香山の畝尾の木本に坐せる泣澤女神を生み給ひし程であつたが、斯くてあるべきにあらねば、遂に意を決して大和を發し、日向之小門橋之阿波岐原に到りて、

其の中つ瀬に禊ぎ穢ひし、黄泉國より受けたる汚濁を洗滌せられたのである。此の小門は一に小戸に作られてゐるが、要するに港灣の小なるもの、橋は斷鼻であつて、岬角斷崖の海中に斗出するを言ひ、阿波岐原は一に檍原に作られて、今の日向の宮崎郡宮崎町附近の沿海一帯の舊稱であつたやうである。乃ち此の地に於て潔身せらるるの時、幾多の皇子皇女を生み給へるが中に、大日靈貴尊即ち天照大神、月讀尊、素戔鳴尊の三人の御子は、取り別けて英邁俊偉であらせられたから、伊邪那岐神の歡喜は一方ならせられずして、「吾多くの子女を生みて、最後に斯る貴き三子を得たる嬉しさよ」と宣ひて、御頸飾なる御統の珠を取りて天照大神に授け給ひ、「汝の尊は高天原を治らすべし」と詔せられたのである。

天照大神の天下統治

此の天照大神は一に日神と申し奉るのであるが、其の英明秀靈なること天日の光明の如く、神徳赫々として六合を照臨し給ふに依りて此の神名があらせられる。次に月讀尊に向ひて、「汝の尊は夜之食國を治らせ」と宣らせ給ふ。

夜之食國の管治

此の月讀尊は一に月弓尊又は月夜見尊に作り、天照大神を日神と申し奉るに對して月尊と申さるのであるが、其の神徳の日に亞ぐを以て月と申すのである。而して其の治らする夜之食國と言ふは、彼の伯耆、出雲、石見方面を夜見國と唱へられたると同じく、高天原の神聖清淨にして事物の進歩の光明に輝けるに對し、尙ほ未だ未開暗黒にして鄙穢なる遠隔の地方を指すの

である。次に素戔嗚尊に向ひて、「汝の尊は海原を治らせ」と宣り給ふ。此の素戔嗚は進男又は荒男であつて、即ち勇猛剛毅の神性を表昭せられたる御名である。

海原の統轄

而して海原を治らせとは、海上一切の事を統管せよとの御意で、其の海上と言へる中には固より海外の事をも含まれてゐること、韓國統治の事績に依つても亦た窺ひ知られるのである。斯くて天照大神は父君伊邪那岐神の大命を承けて高天原に坐し、以て此の天下を統治し給ふや、

農耕食饌の道興る

乃ち先づ保食神をして農耕食饌の道を興さしめられたのである。此の保食神は又た御饌都神と申し、其の職掌より唱ふる所の名

であつて、今日の謂ゆる大膳職であるが、一に又大宜都比賣命若くは大食津姫命とも申され、雄略天皇の御世に丹波國より伊勢に遷し奉りて外宮と稱へられたる豊受大神は即ち大宜都比賣命である。其の初め阿波國に居られたので、農事は早く阿波國に開けた所から、阿波即ち粟國の稱ある所以であるが、今や天照大神の命に依り阿波を出でて丹波に入り、此地に又た五穀を播種せられたのである。上古は今丹波を併せて丹波と言つたもので、其の丹波は即ち田庭である。高天原に於ける神々の御食事に供する米粟は、當時丹波國より奉つたものである。而して古傳には此の保食神の事を記して、「其の首を廻らして國に嚮へば、口よりは飯を出し、海に嚮へば、鰭廣物、鰭狭物、山に嚮へば、毛鹿物、毛柔物、亦た皆口より出づと見ええてゐる。

即ち五穀を始めとし、魚介鳥獸に至るまで、之を調理して食膳に供するの法は、獨り此神に依つて傳へられたのであるから、偕てこそ後世に至つても益々其の神徳を稱へ奉りて、之を伊勢の外宮に奉齋あらせられたる次第であるが、此の保食神は又た倉稻魂神とも申され、世俗には稻荷大明神として尊崇しつゝあるのである。

然るに此の保食神の死去せらるるや、民生を救ふの功德に厚き其の死屍の頭よりは牛馬を出し、其の額の上には粟を生じ、眉には蠶を宿し、眼には稗、腹部以下には稻、麥、大豆、小豆を生じたので、天照大神は大に喜び給ひ、

養蠶の業起り又始めて水田を開く

即ち口づから其の繭を含みて絲を抽き出し給ひて、爾來養蠶の

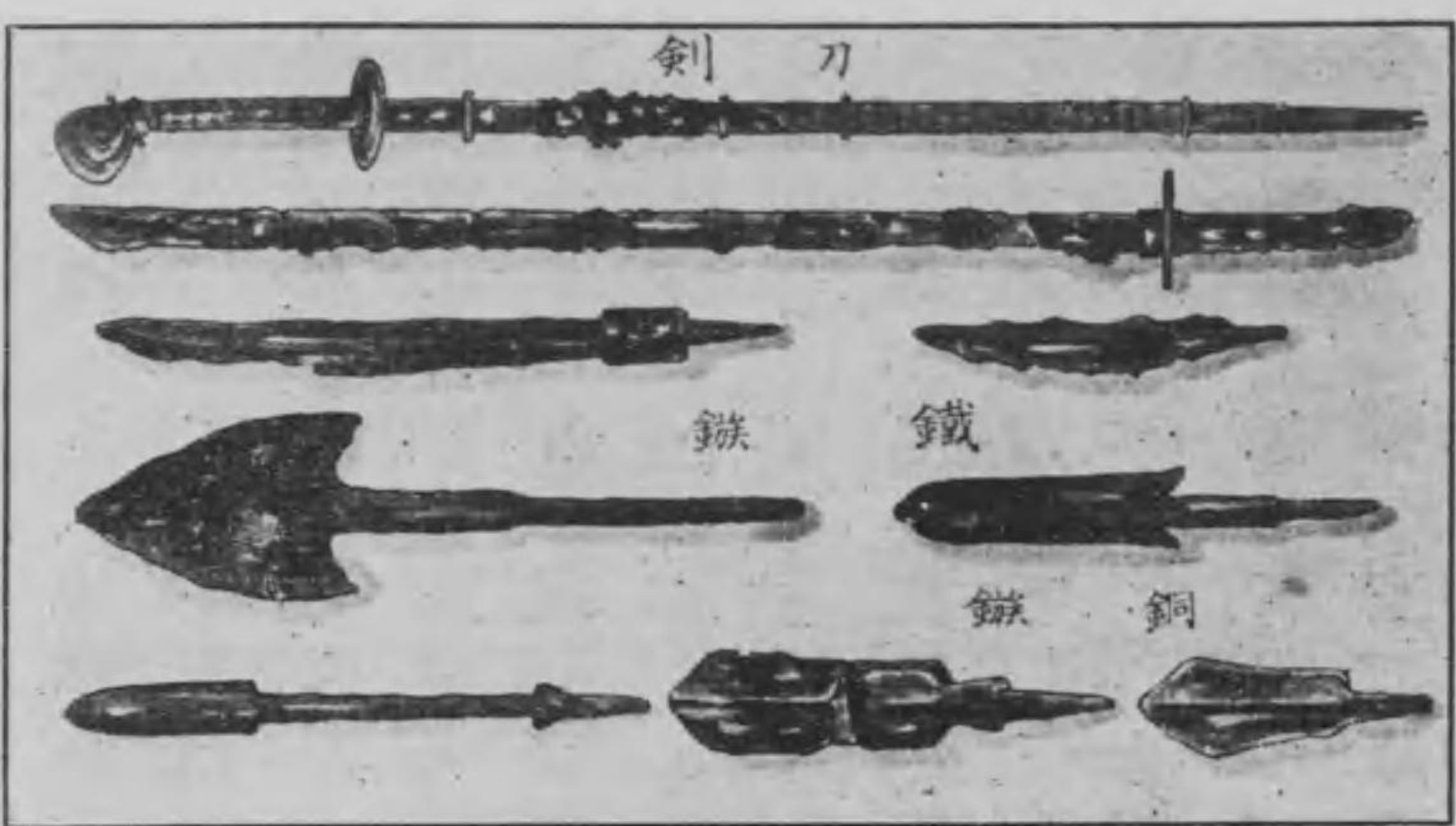
業始めて起り、又た其の稻種を取つて始めて天狹田及び天長田に植ゑて、茲に我國水田の起源を開かれたのである。即ち粟、稗、米、麥、豆の五穀は、既に火田及び水田に播種せられて、農耕食饌の道は養蠶機織の法と共に益々開け、謂ゆる衣食足つて禮節を知るの時代となつた。尤も水田開始の以前に於ては、總べて火田に耕作したもので、殊に粟は五穀の始まりと言はれたる丈あつて、古代に於ては最も重きを粟に置き、五穀と言へば粟、粟と言へば五穀を代稱したものである。されば支那に於ても彼の伯夷叔齊が周の粟を食まずと言つて首陽山に隠れた事蹟などに見ても、其の粟と言へるは五穀の總稱を意味したものであつた。斯くて農事の進歩に伴ひ新に水田の開けたると共に、其の粟は遂に米に亞ぐものとなつて、重きを専ら米に置かるる

に至り、其の秋穫の離々として豊穰なるの喜びより、我國を又た瑞穂國と唱ふるに至つたのであるが、天照大神の御世は即ち既に瑞穂國の時代であつたのである。斯くて大神の御田には、天安田、天平田、天邑井田など、霖旱に遇ふとも損害を受けぬ所の良田があらせられたが、素戔嗚尊の御田は、天穢田、天川依田、天口鏡田などの礪田のみで、水旱並に其の災害を免れなかつたから、素戔嗚尊は其の餘憤を天照大神の美田に漏して暴行を敢てせられ、茲に端なくも天罪を犯さるゝに至り、更に天齋殿の變事を起して、或は神殿を汚し、或は機織女を殺傷し、又た大神を驚かし奉りて梭を以て玉體を傷けさせ給ひしかば、遂に高天原より根國に追放せられ給ふに至つたのである。其の根國は今の出雲伯耆地方の別稱で、極遠の根國は韓半島である

ことは既に述べた所である。

八岐の大蛇退治と天叢雲の名劍

是に於て素戔嗚尊は遂に出雲の安來に着し、之より簸川の上流なる鳥上の地に至り、國神足名椎及び手名椎夫妻の爲めに其の女奇稻田姫の危難を救ひて、越國の八岐大蛇を退治せられたのである。此の簸川は又た肥河に作られ、謂ゆる出雲の大川と稱せらるゝ、簸川郡斐伊川である。其の水源は伯耆の國境なる船通山より發し、船通山の西麓は即ち鳥上の地で、仁多郡の東極である。出雲風土記には、仁多郡鳥上山は郡家の東南三十五里、伯耆出雲の國境なりと見えてゐるから、鳥上山は即ち今の船通山一名船燈山の舊稱であつて、其の東部は伯耆國と爲り日野川の水源である。故に鳥上山の山嶺を分水嶺として、東に日野川



西に簸川即ち斐伊川となつてゐて、此の二川の同名異字たるに見ても、亦た簸川の上流なる鳥上の地の位置を想察することが出来る。而かも其處には國神たる足名椎及び手名椎が居り、曩には黄泉大神と申されたる伊邪那美神が崩御せられて、伯耆出雲の國境なる比婆山に葬られ給ひしとあるに鑑みれば、此の二國の國境は當時頗る重要な地であつたものと思はれる。されば越國なる北陸方面より毎年時を定めて八岐の大蛇が此の地に來り、其の國神の女

を徴しつゝあるのであるが、足名椎、手名椎も亦た之れが爲めに既に其の七女子を徴せられ、今又た最後の第八女たる奇稻田姫をも徴し連れられんとするの期に近づけるが爲め、相擁して泣き悲める際に當つて、恰も素戔嗚尊の到り坐せるに會したのである。其の八岐大蛇なる者は一軀にして八頭八尾を有し、眼は赤酸漿の如く赫灼として光り輝き、松栢檜杉などの大木が其の背の上に生じ、長身巨幹にして八丘八谷に跨ると傳へられてゐる所を以てすれば、何れは亞細亞大陸より北越の地に渡來せる異人種であることは疑ふべくもない。其處で素戔嗚尊は足名椎、手名椎に命じ、置酒して其の大蛇の來るを待たしめ、期に至つて尊自から女装して奇稻田姫に扮し、大蛇既に來つて鯨飲熟醉するや、乃ち佩き給へる十拳劔を抜きて之を寸斷せられた

のであるが、尾端に至つて忽ち劔に聲あり、鋒刃少しく毀損するを見て、怪みて其の尾を裂き給へば、圖らずも名劔一口を獲られたのである。蓋し此の大蛇の居る所には常に其の上に雲氣が籠つてゐるので、人皆其の奇異に驚いてゐたのであるが、其の雲氣こそは即ち此の名劔の威靈であつたから、爾來之を天叢雲劔と命名し、世に稀有の靈劔として尊重あらせられ、後ち素戔嗚尊之を天照大神に獻じて三種の神器の一に加へさせられ、日本武尊の東夷征討に際して更に顯著なる威靈を示せしより、一に又た草薙劔と稱へらるるに至つた。即ち尾張國熱田神宮は此の神劔を奉祀して今日に及んでゐるのである。

天叢雲劔の献上

素戔嗚尊は既に八岐大蛇を退治して裏日本に於ける禍根を絶ち

給ひしより、彼の奇稻田姫を妃として出雲の須賀に宮殿を営まれ、我國に於ける三十一文字の短歌の濫觴と言はるる八雲起つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣をの歌を詠まれたのである。蓋し尊の勇猛剛邁寧ろ峻烈暴悍とも申すべき資性を以てして、其の風韻雅懷なる斯の如きものあるは、即ち武勇の一面には又た優美の性情を具へ給ふを窺ふに足ると共に、由來我國の民性は其の勇猛水火を厭はずして、剛毅壯烈鬼神を泣かしめ、而かも靄々たる温情は赤子をして尙且つ懐かしむるものあるは、即ち又た素戔嗚尊の神性に享くる所多きを想はねばならぬ。斯くて尊は之より更に韓國を経営して母君伊邪那美神の遺業を全うせられんとするに臨み、曩に高天原に於ける天齋殿の變事を悔み、一は先非を謝せんが爲め、一は皇運の隆昌を冀

はんが爲め、彼の天叢雲劍を天照大神に献上して國家鎮護の至寶とし、以て皇謨贊襄の至誠を表し奉らんと欲し、其處て須賀の宮殿を出でて再び高天原に向はれたのである。然るに尊の暴狀に懲りたる神々は、復た其の亂行あらんことを怖れて戦慄し、山川爲めに震駭し、道路皆驚愕するの有様であつたが、獨り櫛明玉命のみは素戔嗚尊を途に奉迎して八坂瓊曲玉を獻じられたので、尊は喜びて之を受け給ひ、天叢雲劍と共に携へて高天原に入京せられたのである。

神代に於ける武裝及び服裝

然るに曩に素戔嗚尊の暴狀に懲り給へる天照大神は、今其の入京の事を聞きて驚き給ひ、是れ必ず我國を奪ひて天位に即かんとするものなるべしとて、乃ち躬親ら男装し、武器を帶して弟



尊の來るを待ち給ふたのであるが、其の武裝の有様を窺ふに、先づ御髪を解きて御髻とし、御裳を括りて袴とし、其の御鬘にも左右の髻にも、左右の御手にも、皆八尺勾璫の五百津統の珠を纏ひ付け、背には幾筋の矢を入れたる鞆を負ひ、手には稜威の高鞆を取り佩き、弓杖突きて振ひ立たせ給ふたのである。之れぞ當時に於ける男子の武裝であるが、曩に伊邪那岐神が黄泉國より逃げ歸り給ふの時、追ひ縋り來る黄泉醜女に向つて、其の髮飾なる黒葛及

び右の髻に挿せる櫛を投げ付け、次に黄泉軍の追撃し來るに對しては、最後の手段として其の佩き給へる十握劔を抜き放ちて之を防ぎ、其の後日向の阿波岐原に潔身せらるるの時、先づ杖を投げ、次に帶、裳、衣、禪を解き、冠を去り、左右の手纏の御統の珠を取り外し給ひ、既にして天照大神を生み給ふや、御頸飾なる御統の珠を取りて大神に授け賜へるによりても、亦た當時に於ける服装と其の裝飾との一斑を知ることが出来る。

天之安河の誓約

既にして素戔鳴尊の高天原に入京せらるるや、天照大神は其の兩足を大地に踏張り、稜威の男健に健びて大音聲に叱咤し給ふらく、「父母既に諸子に任ずるに各々其の境を以てせらる、如何ぞ當に就くべきの國を棄て、來つて此處を窺審するや」と。併し

ながら素戔嗚尊の入京は敢て高天原を窺審する爲めてなく、却て其の皇謨を翼賛するにあつて、既に其の先非を悔み給へるのてあるから、今此の詰問に遇ひても極めて謙讓謹慎の意を表して答へ給はく、「弟固より異心ある者には非ず、諸子各々任ずる所は父母の嚴命に依て定まれること洵に貴諭の如くなれば、之より永く根國に就かんとす。一たび根國に就かば又た何れの時か再會を期せらるべき、乃ち永訣の爲めに雲路遙に此處に来る、而かも測らざりき斯る憤怒の嚴容に接せんとは」と。其の辭色共に溫和であつたが、大神は尙ほ疑念を解き給はず、「果して然らば汝の誠意を披瀝して其の實證を示せ」との仰せに、さらばとて天安河を隔て、大神と相對し、其の清淨潔白なる至誠を表昭せらるることゝなつた。

神性の純潔と皇儲及び皇女の降誕

其處で天照大神は先づ素戔嗚尊の佩き給へる十握劍を請ひ受け、尊の眞心や如何にと之を三段に折りて、天真名井に振り滌ぎ、淨め洗らひて然る後に眞齒に噛み碎きて、吹き出だされたる狹霧の中より生れ給へるは田心姫、湍津姫、市杵島姫の三女神であらせられる。次に素戔嗚尊は天照大神の左の髻の八坂勾璫の五百津統の珠を請ひ受け、同じく天真名井に振り滌ぎ、淨め洗ひて然る後に之を眞齒に噛み碎きて吹き出だされたる氣吹の狹霧の中より、不思議なるかな靈光燦然として生れ給へるは、是れぞ正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊であらせられる。其の正哉吾勝と申さるるは、即ち素戔嗚尊が天位を窺審せざる實證として斯る御子を生み給ひ、茲に異心なきの誠意を表昭して大神の疑念

を解かれ給ひたれば、正に誓約の如く吾れ勝てりとの意味である。其の「速日」は英邁なること天日の明の如くなるを稱し、「忍穂」の忍は大の約言、穂は俊秀の義、即ち其の「耳」の大にして且つ俊秀なるを言ふので、要するに聰明なる神性を表昭せられたる御名である。次に大神の右の髻の飾珠を請ひ受けて吹き出だされたる狭霧の中より天穗日命、御鬘の飾珠を請ひ受けて吹き出だされたる狭霧の中より天津彦根命、左の御手の飾珠を請ひ受けて熊野櫛樟日命、右の御手の飾珠を請ひ受けて活津彦根命を生み給ひ、總べて五柱の男神が生まれさせたのである。斯くて素戔嗚尊は此の五柱の御子を大神の猶子として、皇運の隆昌と寶祚の無窮を祈らせ給ひ、以て自から異心なきの至誠を神明に誓はれたのである。是に於て大神の叡慮始めて解け給ひ、乃ち其

の献ずる所の天叢雲劍と八坂瓊勾玉とを受納あらせられ、此の五子の中の最も英明俊邁に互らせらるる天忍穗耳尊を以て天日嗣の高御座に即かしめ給ひしこそ、實に國家萬年の爲めに慶祥極まりなき次第であつた。而かも五男三女の御子達が、五百津御統の珠の麗美に感應し、又た靈劍の明光を受け給ひて、彩色燦然たる細霧の中より現はれ坐せるの状の如何にも壯麗純美なるは、是れぞ清淨純潔なる神性の明德麗光を表昭して餘蘊なく又た以て日本國民性の高潔至誠なるを示現せらるるものでなくて何であらう。

韓半島の統治

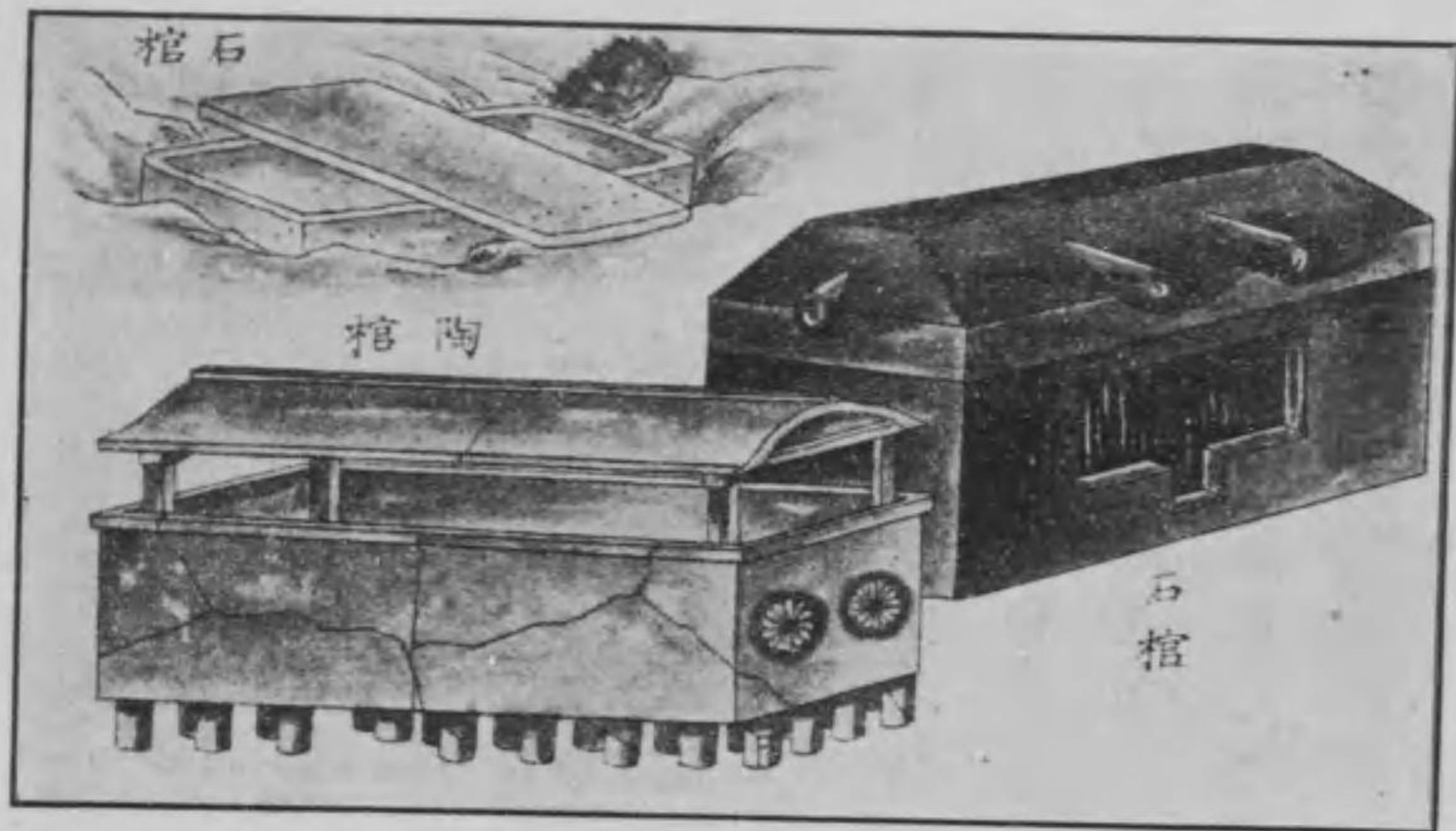
既に國家鎮護の寶劍を献上し、且つ皇儲を定めて萬年の計を確立し、皇運之れより益々隆昌なるべきを見て、又た後顧の患な

きに安んぜられたる素戔嗚尊は、更に新羅に入りて韓國を統治し、以て父母の遺志を繼ぎ其の遺業を恢弘し、斯くて一葦を隔て、高天原と唇齒輔車の實を擧げ給はんが爲め、即ち高天原を辭して再び出雲に還り、其の御子五十猛命と共に豫定の如く極遠の根國に就かせられたのである。斯くて先づ新羅の曾戸茂梨に其の居を定め、次に熊成峰に移られたのであるが、其の曾戸茂梨は今の江原道春川府の中であり、熊成即ち熊川は今の忠清道公州であることは既に述べた通りである。此の時素戔嗚尊が其の子五十猛命に申さるるやう、韓國には金銀多し、之を葦原中國に運ばんが爲めには浮寶なかるべからずとて、

造船と植林事業の勃興

爾來植林事業を韓國に興されたのである。即ち浮寶と言ふは船

船の事であつて、之より先き天浮橋、天鳥磐櫓樟船、又は葦船などあつて、航海舟楫の事は既に開けてゐたのであるが、茲に至つて更に大に造船を奨励せられるべき時勢の進運に逢着したものと察せられる。而して天浮橋の船舶たるべきは曩に述べた所であるが、其の葦船とは一葉の葦にも似たる程の小舟の意味であらう。次に天鳥磐櫓樟船と言ふは、其の船材が楠であつて頗る堅牢なる所から磐櫓船と言ひ、而かも其の航行の速なること鳥の翔るに似てゐる所から天鳥船と言ふので、即ち其の迅速と堅牢と船材とを併せ稱したものが天鳥磐櫓樟船である。然るに素戔嗚尊は此の如き船舶のみを以て満足せられず、大に造船事業の發達を計らんが爲め、即ち先づ植林を韓國に始められたのである。其處で自から鬚を抜き散らし給へば杉と爲り、胸毛



は檜と爲り、臀毛は椶と爲り、眉毛は
 櫟樟となつたから、即ち其の杉と櫟樟
 とを船材に、檜を宮殿建築用に、椶を
 棺材に充てられ、此等の樹種の長ずる
 を待つて、五十猛命をして其の多數を
 韓國より持ち歸らしめ、之を我國に植
 えしめられたのである。是に於て五十
 猛命は其の妹大屋津姫命及び孤津姫命
 と共に先づ九州に渡りて植林を始め、
 之より次第に東に及びて紀伊國に至つ
 た。爾來我國は到る處として青山なら
 ざるなく、連峰峻岳皆樹木を以て鬱蒼

たるに至つた中にも、取り分けて紀伊國には其の生長繁茂の著
 しきものがあるので、上古は紀伊國を木國と唱へ、宮殿建築の
 良材は概ね木國の大峽小峽より斫り出されたものである。され
 ば紀伊國海草郡西山東村に鎮坐する伊太祁曾神社には五十猛命
 を祀り、同郡川永村字田森の大屋都比賣神社並に都麻津比賣神
 社は、大屋津姫命及び孤津姫命を祀り、之を紀伊の三所神と唱
 へて歷朝の深く尊崇し給ふものは、即ち五十猛命並に其の妹神
 の植林事業の功績が偉大なるものあるに依るので、殊に五十猛
 命を一に有功之神と申さるるのも亦た實に之れが爲めである。
 然る程に素戔嗚尊は久しく韓國に留るを欲し給はず、「此の國は
 吾の居るを欲せざる所なり」と宣ひて、遂に埴土を以て舟を作り、
 再び東に渡りて出雲に還られたのである。即ち出雲國簸川郡日

御崎の須佐神社、及び飯石郡東須佐村の日御崎神社は素戔嗚尊を祀り、又た意宇郡並に出雲郡にある辛國伊太氏神社には共に五十猛命を祀れるに見て、素戔嗚尊及び其の子孫の出雲に於ける遺跡を想察するに難くはないのである。

大己貴命の裏日本の經營

之れある哉素戔嗚尊の妃奇稻田姫の生む所の八島士奴美神が、刺國若媛を娶りて生める大己貴命は、出雲を根據として専ら山陰北陸方面の裏日本を經營せられたのである。而して其の神性英明俊偉にして功業一世を覆ふものがあるから、一に又た顯國玉神、大國玉神、大國主神、大物主神、大名持命、八千矛神、國作大己貴命などの別名がある。其の顯國玉又は大國玉と言ふは、國家經營上の功神たるに依り、護國の魂として尊崇するよ

り來れる名稱で、「顯」及び「大」は其の功績の顯著偉大なるを言ふのである。其の大國主又は大名持と言ふは、國土を領することの廣大なるを稱へ、大物主の物は神を指示する代名詞であるから、國中の諸神を統御せらるるの稱號で、其の大己貴は一に大穴牟遲に作られ、即ち大名持と同義である。而して八千矛神と言ふは、威武赫々として遠近を平定せられたる武勇の神の稱である。而かも温厚篤實、堅忍自強、禮讓謙遜、仁慈博愛なること此の神の如きは他に多く其の比を見ざる所である。例へば其の庶兄弟八十神の爲めに、自から袋を背に負ひて從者に扮するの耻辱を蒙るも克く之を忍べるが如き、或は因幡に至れる時、皮膚の裂傷に泣き伏せる裸兎を憫みて、之れが治療の法を教へたる仁慈の如き、或は祖父素戔嗚尊の訓陶を受けて具さに艱苦

辛酸を嘗め、以て堅忍不撓の精神を鍛鍊修養したるが如き、一として後世萬民の模範たらぬものはないのである。斯くて遂に庶兄弟八十神を服して出雲の宇賀山の麓に宮殿を作り、以て裏日本經營の根據を定むるに至つた。其の宇賀は和名抄に出雲郡宇賀郷と見え、後には楯縫郡に屬し、今は簸川郡となつてゐるが、其の宇賀山は即ち十六島灣の東畔なる御崎山であると言はれてゐる。此の十六島の「うつぶ」は韓語の「九」、「るゐ」は「入江」で、即ち多數の小島が點綴せられたる間に海水の曲折せる狀に對して之を「九つの入江」と呼び做せる韓語であるが、年代の經過と共に何時しか其の語義は忘れられ、遂に轉じて其の多數の小島を呼ぶの名稱に用ひらるるに至つたから、文字は十六島であるが、其の訓み方は昔の九つの入江その儘の「うつぶ」であるなどは、

頗る面白き現象であると共に、韓語が地名の上で使用せられて今日に及べるものが獨り此の十六島のみでなく、尙ほ多數に存在するのを見ても、日韓兩國の關係が神代よりして如何に密接であつたかを窺知するに充分であらうと思はれる。

北陸方面の循服

斯くて山陰方面を平定せられたる大己貴命は、更に北陸方面の經營に着手し、先づ能登及び越前越中を循服せられたのである。即ち越中國礪波郡の氣多神社、及び能登國羽咋郡の一之宮なる氣多神社は、何れも大己貴命を奉祀して、並に其の遺跡を傳へてゐるが、中にも其の一之宮は崇神天皇の御世の創建なりと傳へられ、古は北陸第一の大祠として多數の神戸を有つてゐたのである。而して其の能登は一に能等に作られ、初は郡名であつ

たが、養老二年に越前の四郡を割きて一國を置かれ、其の郡名を移して能登國名とせられたのである。而して其の能登は蝦夷語の半島の義であるから、大己貴尊が此の地方を循服せられたる當時に於ては、定めて蝦夷種族の巢窟であつたらうと思はれて、之れが循服化育の如何に困難なりしかを想察するに餘りがあるのである。之より更に越後に入り、其地の女神沼河比賣と婚を結びて附近一帯を綏服し、北陸の經營は茲に其の全きを告げ、爾來再び此の地方に於ける異族の反亂を見ざるに至つた。是に於て又た出雲に還り、曩の宇賀の宮殿に對する別殿を三穗之崎に作られたのである。

少彦名命の協力經營

此時に當つて神皇產靈神の子なる少彦名命が、天羅摩船に乗り、

鷓鴣の皮衣を着て、三穗之崎に到着し、爾來大己貴命と共に兄弟の約を結び、同心協力して大に國家經營の事に盡瘁せられたのである。其の天羅摩船は白藪の皮を以て作つたもので、白藪は豆科の蔓草であつて、其の結ぶ所の莢は熟すれば紫色を呈し、堅に裂けて其の形舟に似てゐる。而して鷓鴣は雀に似て小なるもので、其の皮を衣として着る程の人であるから、舟も小、人も小、即ち其の名さへ矮小を意味する少彦名命で、父君神皇產靈神の手の指の間より漏れ出でたりと言はる程である。开は兎も角も大己貴命と共に同心戮力して、此の國家を經營せられたる功績は、其の體軀の矮小なるに反して實に偉大なるものがあつた。即ち醫藥を以て人畜の疾病を治癒し、又た各處の温泉を發見して温泉療法を教へ、更に禁厭の法を定めて鳥獸昆蟲の

災害を攘ひ、萬民をして皆其の恩恵に頼らしめ、又た始めて酒を造つたので、世に少彦名命を久斯神と言ふのである。即ち久斯は酒の義で、古語に酒を黒酒白酒と言ふやうに「き」と稱し、今も尙ほ御酒と言へる「き」は其の久斯の約言である。之を「さけ」と言ふは「榮え」即ち「榮水」の義であるとも言ひ、又た「さ」は發語で、「け」は「き」の轉じたものであるとも言はれてゐるが、要するに民生の爲めに諸種の事業を創め、其の疾苦を救はれたる神徳は實に偉大であつた。且又た諸方を巡狩して足跡東西に洽く、或は石見國意都の齋殿に居りて山陰の西部を経畧し、或は播磨國神前郡聖岡に到りて山陽道方面の經營に従事せられたのである。斯くて其の功畧は成るに及び、尙ほ海外經營の忽せにすべからざるものがあるので、少彦名命は是に至つて後事を大己貴命に託し、

遠く萬里の異域たる常世國に向つて出發せられたのである。

常世國との往來の要津

古傳に據るに此の時少彦名命が常世國に出發せられたのは、出雲の熊野岬より其の幸ある纜を解き給ひしと言はれてゐる。今出雲國意宇郡に熊野村があつて、其の地は現今に於ては港津たるに適してゐないが、神代に於ては或は岬角相擁せる良津であつたかとも思はれる。又た曰ふ少彦名命は粟島に到りて粟の莖に登り給へば、其の體軀矮小なるが爲めに彈かれて常世國に到れりと。而して伯耆風土記には、相見郡の郡家の西北に粟島あり、少彦名命が粟を蒔き給ひて秀實離々たり、故に粟島と言ふと見えてゐる。果して然らば常世國との交通は出雲若くは伯耆の沿岸よりせられたるものゝ如く考へられる。即ち少彦名命が

其の初め海外より出雲の美保岬に歸航せられたるに依つても亦た思ひ半に過ぐるものがあるであらう。然るに又た粟島は淡島に通じ、其の淡島は伊邪那岐、伊邪那美の二神が大八洲經營の初に當つて蛭兒に次ぎて生み給ふ所のものであるから、其の經營の本據として八尋殿の所在地たる磯馭盧嶋と程遠からぬことを察知せられ、其の磯馭盧嶋は今の淡路島若くは其の沖島なるべしと言はれてゐるに鑑みて、淡島は或は淡路島ではあるまいかとも思はれる。即ち仁徳天皇の由良海峽を詠み給へる御製に、「おし照るや、難波の崎ゆ出て立ちて、わが見れば、粟島、於能碁呂島、檳榔の島も見ゆ、佐氣都島見ゆ」とあるに鑑みれば、少彦名命は或は紀淡海峽より外海に出て、順風一路南に向つて常世國に赴かれたのではあるまいか。紀伊國の地名にも亦た淡島

があり熊野浦があり熊野岬もあるから、必ずしも出雲伯耆の沿岸のみを常世國との往來の要津なりと斷言することは出来ない。要するに常世國は海外の絶域たるにも拘はらず、神代に於て早く皇謨の其の地に及べるを虔仰すると共に、神籌既に宇内を呑むの慨あるを驚嘆せずには居られないではないか。

葦原中國の統一

之より先き高天原にありては、天照大神が此の豊葦原之千秋長五百秋之瑞穂國は、我が御子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊の知らする國なりと詔り給ひ、即ち天忍穗耳尊をして天日嗣の高御座に即かしめられたのである。而して茲に千秋長五百秋と言へるは、皇基萬世に鞏く、幾千代かけて榮えますべき世界無比の邦國たるを意味し、其の瑞穂國とは、地味肥沃にして五穀豊穰な

るを稱へたりとも言ひ、又た「瑞」は五穀豊穰の美稱ではなくして、風土人情の美を稱へ、「穗」は稻穂の穂ではなくして、火、日と同じく俊秀拔群の義であつて、即ち山川秀麗、氣候順良、君臣一體、上下一心の美國たるを言ふとも説かれてゐるが、吾等は單に五穀豊穰の國と説ける前説よりも、寧ろ萬邦無比の國體より解ける後説に左袒する者である。何となれば天地と始終すべき千秋長五百秋の萬世一系の皇統が、其の天位を彌つぎくに繼承し給ふべきことは、天照大神の此の單純なる大詔に於て千萬無量の神意を籠め給はれるを虔仰するからである。斯くて天穗耳尊は天位に即かせらるると同時に、先づ地方を巡幸して國狀を察せられたのであるが、當時地方には尙ほ多くの邪神があり、或は殘賊横暴を極め、或は不逞の徒各地に割據し、喧々囂

々として物情騷然、其の醜狀洵に慊惡唾棄すべきものがあつた。故に古傳には之を螢火光神あり、又た蠅聲邪神ありて、草木も皆物言ひ争ひければ、彼地は未だ平がず、不須也頗傾也凶目杵國かと言つて、忍穗耳尊の長大息し給へることが見えてゐる。是に於て天照大神は高皇產靈神と諮り給ひ、八百萬の神達を天安河原に會して裏日本の平定に關する御諮問を下された。

天安河原の會議

此の會議に於ける御諮問は、「葦原中國は吾が子の治しめさす國であるから、曩に忍穗耳尊を天降して地方を巡幸せしめたるに、惡神横暴を極めて物情騷然たりと言ふ事であるから、之れが平定の任に當らしむべき者は誰であらう。宜しく慎重審議して其の適任者を推薦奏上せよとの御意である。是に於て八百萬の神

達は、先づ明智密察にして思慮周到なる思兼神をして思はしめ、素戔嗚尊の御子なる天穗日命こそ善からんとて、衆議一決の上此の勇神を御推薦申し上げた。仍て高天原よりは天穗日命を出雲に遣して、大己貴命に傳へしむるに領土奉還の大命を以てせられたのであるが、三年を過ぎても復命する所がない。是に於て更に天穗日命の御子なる武三熊之大人を遣はされたが、之れも亦た還つて來ないので、高天原に於ては再び天安河原の會議を開いて、更に何人を遣はすべきかを御下問あらせられた。此の時八百萬の神達皆曰さく、天國魂神の御子なる天稚彦は勇武の壯士である、宜しく之を遣し給へと。其處で高皇產靈神は天稚彦に授くるに天鹿兒弓と天真鹿兒矢とを以てせられ、且つ天照大神の大詔を傳へて、「豊葦原中國は、是れ吾が子孫の王たる

べき地である。而かも殘賊強暴邪神横惡なる者があるから、汝宜しく此の弓矢を以て往いて平定せよと仰せられた。其處で天稚彦は大命を畏みて出雲に赴いたのであるが、彼の地に到ると同時に又も軟化して留り住み、八年を経過すれども復命する所がない。是に於て雉名鳴女と言へる密偵を放ちて其の状を探らしめたのであるが、此の密偵は稚彦の觀破する所となつて其の職に殉じたので、高天原に於ては三たび天安河原の會議を開き、最後の派遣者たる勇將の選任に關して慎重なる審議を重ねしむるの已むを得ざるに至つた。其處で八百萬の神達は熟議を凝らしたる結果、皆曰さく、磐裂神、根裂神の御子なる磐筒男神、磐筒女神の生みませる經津主神こそ適任疑ひあるべからずと。此の時燂速日命の子なる武甕槌命進み出て、「經津主神のみ獨

り勇將で、我は勇將に非ずと言ふの理かあらん、俱に往きて征討の功を奏せんと申し出てたる其の辭色並に慷慨壯烈を極めたので、乃ち經津主神武甕槌神の二神を遣し、勅詔八ヶ條を齎して大己貴命の領土奉還を説かしめられた。

大己貴命の領土奉還

此に於て二神は大命を畏み、兵を持して相共に出雲に下向し、伊那佐之小濱に到つて大己貴命に會見し、傳ふるに勅詔を以てしたのである。此の伊那佐之小濱は或は五十狹狹之小江、或は五十田狹之小江とも記されてあるが、出雲郡伊那佐神社のある所が即ち其の地であらうと思はれる。今は簸川郡に屬してゐるが、要するに十六島灣頭の宇賀宮殿の所在地を唱へたものであらう。而して其の勅詔八ヶ條とは、一、汝の領く所の國土は天

照大神の御子なる天忍穗耳尊の治らすべきものである。二、汝は爾後政務を退きて専ら神祇祭祀の事に當れ。三、然らば汝の爲めに結構宏壯なる天日隅宮を新營せん。四、又た汝に供するに百畝の田を以てせん。五、汝の遊航の爲めに各種の船舶舟艇を造り與へん。六、更に記念として高天原なる天安河に架橋して永く汝の功績を表昭せん。七、且つ賞賜するに百八十縫の白楯を以てせん。八、天穗日命を左右に侍せしめ、汝の任務たる神祇祭祀の事を主らしめんと言ふのである。是に於て大己貴命は優渥なる勅詔を拜謝し、「吾が領く所の國土は天神の御子當さに之を治らし給へ。されど吾子に事代主命あり、願くは彼に就て更に其の意を糺し給はんことを」と奉答した。此時に當つて事代主命は美保之崎の別殿に居り、魚鳥を漁獵して樂としてゐた

のであるが、二神は乃ち部將たる稻背脛を使者とし、熊野諸手船一名天鳩船に乗つて美保之崎に到り、傳ふるに勅命を以てし、且つ告ぐるに父大己貴命の恭順を以てしたのであるが、事代主命も亦た大命を畏み奉りて、「我が父既に領土を奉還するに、我何ぞ之れに違ふべけんや」と答へて、遂に韜晦したのである。是に於て大己貴命は全く其の領土を奉還すると共に、其の功神たる岐神を推薦して高天原の輔翼の臣たらしめ、且つ自から四方經營の功を治めたる寶劍廣矛を献上して、天神の御子の武運長久を冀ひ、更に其の子孫を大和の各地に配置して高天原の護衛の任に當らしめたる無二の忠誠に至つては、即ち實に顯國魂大國魂として萬代護國の神徳を不朽に頌せらるる所以である。而して彼の岐神は曩に黄泉平坂に於ける道反大神で、後には皇孫

瓊瓊杵尊の西下に際し天八衢に奉迎して、筑紫巡幸の順路を奏上し奉れる猿田彦大神である。

皇化更に東海東山に及ぶ

此時に當り事代主命の弟なる建御名方命のみは、其の暴勇を恃みて大命を奉ぜず、兵を持して二神に抗したから、經津主神及び武甕槌神は一舉に之を破つて其の逃ぐるを追撃し、遂に科野洲羽海に窮追した。此に於て建御名方命は進退維れ谷まり、降を二神の軍門に乞ひて爾後一意恭順を表し、又た決して諏訪郡より出づることなかるべし。幸に一命を助けて諏訪一郡を父大己貴命の讓土とし、我が爲めに之を天神に奏請せられよと哀訴歎願に及んだので、即ち事の由を高天原に稟請し、其の勅許を受けて降伏を容したのである。偕て此處に科野とあるは今の信

濃洲羽海は諏訪湖であるが、諏訪郡中洲村字神宮寺に諏訪の上社があつて建御名方命を祀り、下諏訪町に諏訪の下社があつて其の妃八坂刀賣命を祀り、並に諏訪明神と稱して官幣中社に列してゐるのは、即ち其の遺跡であるが、此等神社の祭禮に於ける神輿の渡御には頗る暴悍の舉動があつて、往々怪我人を出すと云はれてゐるのは、古來剛勇強悍の武神として深く尊崇される遺風に外ならぬ。斯くの如く建御名方命の降伏となつた後、二神は更に建葉槌命をして悪神香々背男を討たしめ、又た自から岐神を嚮導として各地を巡歴し、命に逆ふ者は誅し、歸順する者は賞し、遂に全く平定の功を奏したのであるが、世に武甕槌神を常陸の鹿島神、經津主神を下總の香取神と稱して人口に膾炙する所あるに依れば、二神の巡歴は常陸下總地方にも

及べるものと想察せらるると共に、曩に伊邪那岐、伊邪那美の二柱が大八洲を經營あらせられたる當時に比ぶれば、皇化は更に東に擴大せられて、東海東山の各地に及べるを虔仰するのである。

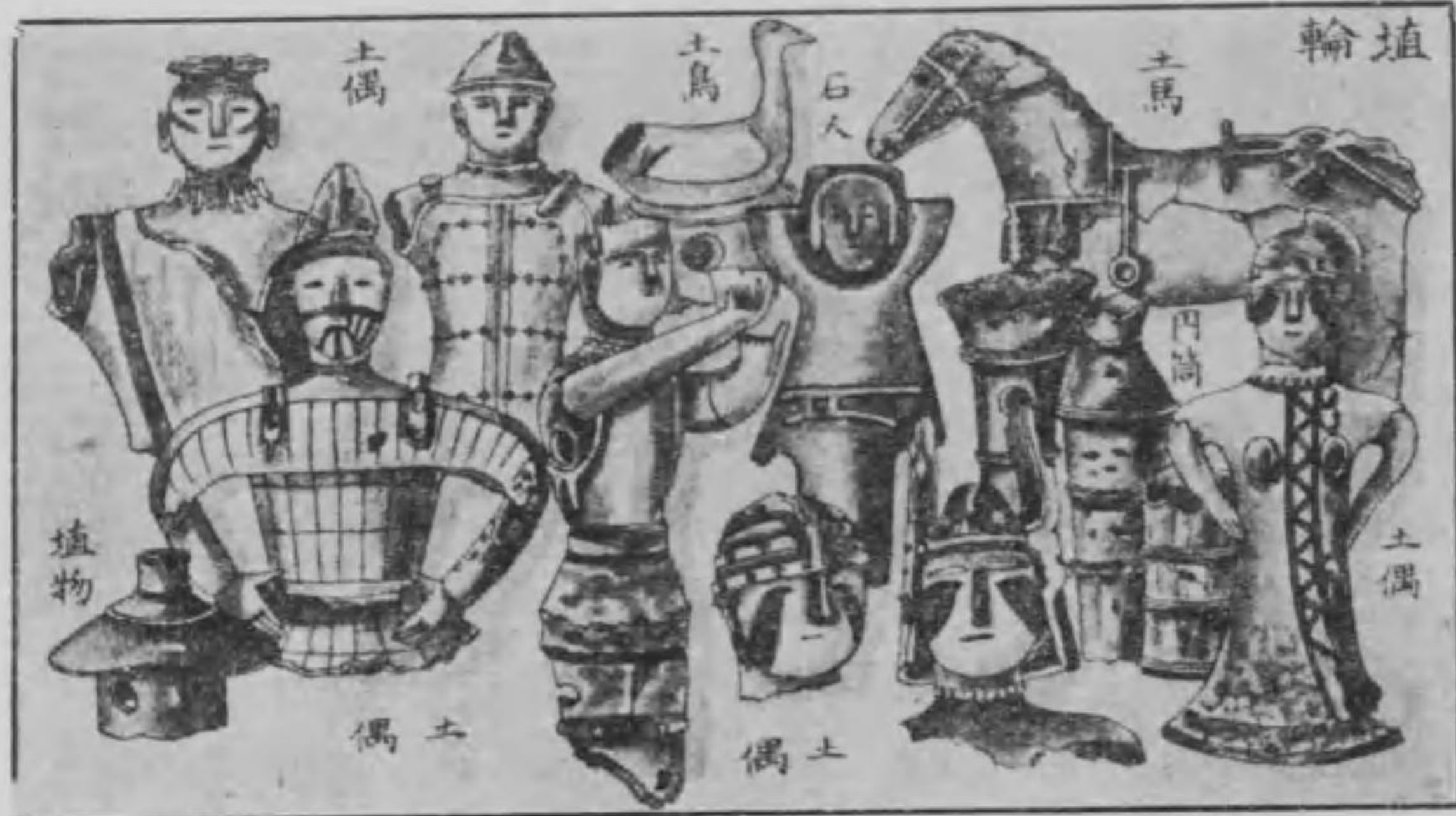
高天原と出雲との密接關係

斯くて平定の功を全ふしたる經津主、武甕槌の二神は、大己貴命以下歸順の諸神を率ゐて大和の高市に凱旋し、天照大神及び高皇產靈神に復命するに八十萬の神達の恭順誠欵の事を以てした。是に於て高皇產靈神は深く二神の武功を賞せられ、又大己貴命の忠悃の至誠を嘉して、配するに己が女三穗津姫を以てし、且つ八ヶ條の勅詔に基づき、出雲の多藝志之小濱に日隅宮を建て、此處に居らしめたのである。此の三穗津姫は栲幡千千

姫の妹で、初め丹波に居られたから、即ち丹波國桑田郡の出雲社には三穗津姫を祀られてあるのである。而して多藝志之小濱は簸川郡武志村の海濱であつて、其の日隅宮は即ち今の杵築大社の境域である。之れよりして高天原と出雲との關係は益々密接となり、葦原中國の統一と共に天下遂に邪神横暴の跡を絶つに至り、萬世の皇基茲に確立して、皇運の隆昌日月と其の盛を争ふものあるに至つた。

天孫瓊杵尊の筑紫降臨

斯の如く中國既に平定に歸して天下靜謐に屬したので、天忍穗耳尊は乃ち伊邪那岐神の遺志を奉じて筑紫に降臨し、日向を本據として宏謨を海外に伸張せしめ給はんとし、其の調度鹵簿も亦た既に定められたのであるが、是より先き高皇產靈神の女栲



幡千千姫を娶り、御子天火明命及び天津彦彦火瓊瓊杵尊を生まれたのである。而して此の瓊瓊杵尊は天資聰明英邁に互らせられ、祖母君天照大神並に外祖父高皇產靈神の鍾愛最も深くあらせられたので、世に特に瓊瓊杵尊を天孫又は皇孫と申し奉るのであるが、此の天孫の尊は、父君天忍穗耳尊の奏請に依り、父に代つて筑紫に降臨せらるる事となり、其の鹵簿調度は一に父君の前定の通りに決せられたのである。其の母君の栲幡千千姫は、又た萬幡豊秋津

師比賣命、栲幡千幡姫、天萬栲幡千幡姫と申されてゐるが、栲は樹の名であつて、其の樹の皮を以て衣を織るを栲幡と言ひ、其の織り成されたる物の縮緬に類する所から「千千」と言ふと説かれてゐるが、要するに千幡と言ひ萬幡と言ふに鑑みれば、千千は猶ほ千萬と言ふに同じく、如何なる機織の道にも長じ給ひしを稱へ奉れる御名であらうと思はれる。又た以て神代に於ける機織の進歩を窺ひ知ることが出来るのである。斯くて天孫瓊杵尊の筑紫降臨の議の定まると共に、天照大神は其の猶子たる田心姫、湍津姫、市杵島姫の三女神を先づ筑紫の胸肩に降して豫め天孫の藩屏たらしめられたのであるが、其の胸肩は又た臍形に作られ、筑前國宗像郡の地は即ち夫れて、何れも皆胸肩君水沼君等の祖神である。既にして天孫將に筑紫に降臨せられん

とするに臨み、天照大神は寶祚無窮の大詔と寶鏡奉齋の教訓とを垂れ給ひて、三種の神器を天孫に授け、又た供奉の諸神に勅するに其の輔弼の功を全ふすべきを以てせられ、斯くて天孫は鹵簿肅々として高天原を發し、稜威の道別に道別ける警蹕の聲も嚴に、西九州を指して雲路遙に天降られたのである。

猿田彦大神及び供奉の諸神

初め高天原を發して先驅其の行を啓くの時、天之八衢に立ちて此の行を迎ふる所の一人の神がある。其の鼻の高さは七咫、背の長七尺、而かも巨眼爛々として八咫鏡のやうであるから、何人も之れに近づく者がなく、鹵簿は一時立ち佇みの態であつた。茲に咫とあるは手の指の一節の長さであるとも言ひ、又は拇指と中指とを擴げたる丈の長さであるとも言はれてゐるが、要す

るに隆鼻巨幹の異神で、其の名を猿田彦大神と言ひ、曩に大己貴命が高天原の輔弼の臣として推薦せられたる岐神が即ち夫れである。然るに八十萬神達は皆其の容貌の怪偉なるに怖れて、之を見ることさへも逡巡する所から、天孫の勅命に依り天鈿女命が之れと應對し、諧謔破顔先づ猿田彦の膽を奪ひ、而かも温恭柔順の女性を以て剛邁峻烈なる男性を中和せしめ、斯くて互に應答を重ねたる後、猿田彦大神に依つて天孫西降の地は筑紫日向高千穂穂觸峯なるべきを教へられ、一行此の言に従つて即ち西降の途に就いたのである。而して供奉の諸神は、祭祀を主る所の天兒屋根命及び太玉命、舞樂を主れる天鈿女命、鏡作を職とせる石凝姥命、玉作を職とせる玉祖命、並に天孫の御言を奉じて政務に參與する思兼神、宮門護衛の任を拜せる手力男神

及び天石門別神、兵馬の職を帯べる天忍日命及び天津久米命と其の二十五物部の造などて、鹵簿莊嚴を極め、威儀堂々たるものがあつた。

高千穂之穂觸峯

斯くて天降りませる筑紫日向高千穂之穂觸峯と言ふは何處であるか。古傳には又た之を襲之高千穂峯、高千穂之穂日峯、高千穂之添山、高千穂之二上峯とも言つてある。乃ち之を日向古風土記の殘篇に見るに、「白杵郡智鋪郷、天津彦彦火瓊杵尊が天の磐座を離れ、天の八重雲を排き、稜威の道別に道別きて日向之高千穂二上峯に天降ります。時に天暗冥にして晝夜別れず、人物道を失ひて物色別ち難し。茲に土蜘蛛あり、名を大鉗小鉗と曰ふ。二人皇孫尊に奏言すらく、尊の御手を以て稻千穂を拔

きて粃と爲し、四方に投げ散し給は、必ず開晴なるを得んと。時に大鉗等の奏する所の如く千穂の稻を搓きて粃と爲し投げ散し給へば、即ち天開晴にして日月照光す、因て高千穂二上峯と曰ふ。後人改めて智舗と號すとあり。和名抄には智舗を智保に作り、續日本後紀及び文德實錄には高千穂に作り、神祇拾遺には單に千穂と見え、建久八年の日向圖田帳には高知尾莊とし、後ち之を高千穂庄と改め、現今は高千穂村と稱して十八村を包有してゐる。而して其の中心地は三田井村であつて、祖神族の遺物たる曲玉管玉の類、並に先住原人の遺物たる石器の類は、三田井村附近に於て最も多く發見せられ、此の地に連接せる肥後の阿蘇郡の阿蘇、豊後國直入郡阿蘇野の阿蘇は、共に熊襲の襲、襲之高千穂峯と同じく、山岳重疊の間に於ける山の隈、山

の脊の地たるを稱するのである。且つ直入郡の南隅にして日向と境を接する所に九重野があり、其の北に久住村及び久住川あり、更に大船山に連接して九重山あり、又た郡名に玖珠あるは、皆穂觸即ち久志布流の遺名の約言であらうと思はれる。今高千穂村大字三田井に穂觸神社があつて、古史に見えたる高千穂神社が即ち夫れである。神祇拾遺には瓊杵尊、日向千穂神社と見え、仁明天皇の御世には官社に列し、續日本後紀には日向國無位高千穂皇神に從五位下を授け奉ると見え、三代實錄には日向國從五位上高千穂神に從四位上を授くと見えてゐる。是に由て之を見れば、天孫降臨の高千穂は、其の初め今の日向國西臼杵郡高千穂村であつたであらう。或は之を霧島山なりとの説もあるが、其の霧島山説は全く妄誕て何等の史跡をも留めてゐな

いのである。殊に續日本後紀に日向國諸縣郡霧島峯神社、官社に預かると見え、文德實錄に日向國從五位上霧島神に從四位下を授くと見え、更に延喜式に日向國諸縣郡霧島社と見えたる霧島神社は、未だ曾て高千穂神社なる名稱の下に呼ばれたることなく、其の高千穂神社は白杵郡にあり、其の霧島神社は諸縣郡にあることは正史の明記する所であるから、之を混淆して異説を立つることは許すべからざるものである。若し夫れ世俗に謂ゆる霧島山上の天逆鉾なる物を以て天孫の手づから樹て給ふ所となすが如きは、或は黃童織婦を欺くに足るであるうが、未だ以て常識を具ふる者の耳を傾けしむるには足らぬ。殊に其の逆鉾なる物は僅に三百年以來の製作で、徳川幕府の初世に當つて京都に於ける物議を醸し、藩命に依つて之れが製作者たる鹿兒

島の鍛工池田某が、世論に對する犠牲となつて死を賜ひ、而かも表面は暴死として取り扱はれたので、餘りの残念さに堪へ兼ねたる其の子は遂に狂態となつた事實がある。而して斯る紛擾の間に於ては、彼の逆鉾なる物は一時霧島山上より其の姿を隠して、日向方面の山麓に保存せられてゐたのであるが、物論漸く鎮つた後、何時しか再び山上に樹てられて今日に至つた。然るに大正四年の春、日向國諸縣郡の一農夫が、此の逆鉾を抜き取りて山麓に携へ來り、之を路傍に遺棄して附近の住民を驚かしめた事實がある。逆鉾の靈驗も此に至つては又た如何とも爲し難きものと見える。

高千穂之穂觸の語解

然るに霧島山を高千穂峯なりとする説に左袒する一部の學者は、

穗觸峯若くは穗日峯を其の語義より解釋して、「くしふる」は「奇火
 降る」又は「奇石降る」の約言で、「穗日」は「奇火」即ち「神火」であるから、
 穗觸峯とは火山の事である。日向に於ける火山と言へば霧島山
 の外にはないから、霧島山は即ち高千穂峯であると言つてゐる
 が、如何に神代の神々とは言へ、歴代天皇の御先祖であり、又
 た吾等臣民の高祖であらせらるる所の人格者たる以上は、火山
 の絶巔を選んで其の皇居を定め給ひしとも想へないのみならず、
 此の語義上の解釋は、其の根本に於て誤謬たるを免かれぬので
 あるから、吾等は何を好みて天孫並に供奉の神々が、噴火山た
 る霧島山巔に其の居を定め給ひしかとの疑念を抱くには及ばな
 いのである。夫れは何故かと言ふに、久志布流の久志は、韓語
 の居西、吉士、尼師と共に國王若くは貴人の稱であり、布流は

卑離、夫里、原、牟羅と共に城邑村里の古語であるから、穗觸
 とは「國王の城邑」と言ふことであつて、其處にある所の山岳は即
 ち穗觸峯である。必ずしも一山一峯を限るの稱ではない。又た
 穗日峯の穗日は同じく穗觸の約言であらうと思はれる。而して
 皆共に冠する高千穂と言へる詞を以てしてゐるが、此の高千穂
 は後世に至つて地名となれるも、神代にあつては久志布流即ち
 「國王の城邑」と言へる其の國王の形容詞であると解釋するを至當
 と思ふのである。神武天皇が宮崎宮に坐して東征の事を議し給
 へるにも、古傳には高千穂宮と言つてあるのを見ても、恰も天
 神の皇居を高天原と言ふやうに、高千穂は其の初め地名ではな
 くして、國王又は宮殿に對する尊稱であつたものと解せられる。
 即ち高は尊嚴高貴の義、千は助辭であつて、穗は火及び日と同

じく俊邁靈異を稱へたのであるから、高千穂之穂觸峯と言ふことは、尊嚴なる國王の居邑にある峯、即ち皇居の所の山と解釋することゝが穩當であらうと思はれるのである。

吾田長屋笠狹之碕の皇居

此の高千穂穂觸の地は山岳重疊の間で、古傳に謂ゆる齋完之空國であるから、固より永久の皇居には適してゐない。其處で天孫は更に好適の地を撰定せられんが爲めに更に巡幸し給ふ事となつた。而して茲に齋完と言ふは即ち碕碕の瘠地を稱し、其の齋は脊、即ち山の脊を言ふのである。且つ空國は一に韓國に作られてゐるが爲めに或は朝鮮を指すのであらうと言ふ説もあるが、夫れは文字に拘泥した結果で、實は空國も韓國も共に山嶽不毛の地を言ふのである。斯くて天孫は山嶽重疊碕瘠不毛の地

を出でて新に皇居を定め給へる所は即ち吾田長屋笠狹之碕であつて、前は渺茫たる大洋に臨み、豊榮昇る朝日は鵬程萬里の波を浴び出でて、其の幸ある影を先づ此處に直射し、後は廣原遠く連りて茜根さす夕日に五色の雲を彩られたる形勝の地であるから、此地は朝日の直刺國、夕日の日照國なり、此の地甚く吉き地なりと詔り給ひて、即ち底津石根に宮柱太知り、高天原に千木高知りて坐しましたのであるが、古傳には又た之を高千穂宮と言ひ、或は高天原とも言つてある。蓋し日向の國號は、天孫の朝日の直刺國と仰せられたる此の詔に始つたもので、其の由來頗る遼遠であり、神跡亦た顯著なるものがあつて、神武天皇の東征に至る迄、日向は實に皇運培養の靈域であつたのは、一に此の朝日の直刺す所の雄大壯嚴なる風光を賞て給へるに依

るものと想察するの外はない。後ち景行天皇が熊襲を親征せられて日向高屋行宮に坐せる時、兒湯縣の丹裳小野に出てまして、東を望み、「是の國は直に日の出づる方に向ふ、是れ日向國號ある所以なり」との御言葉を其の左右の侍臣に仰せられたるは、即ち天孫の詔に裏書し給ふものであつて、其の兒湯縣は今の兒湯郡であり、高屋行宮の遺跡は同郡都於郡村に傳へられ、其の都於郡の都於は殿、郡は大邑たることは既に述べた通りであるから、都於郡村名は景行天皇の高屋行宮の所在地たるより起れるものと解するが至當である。従つて景行天皇が東望して日向國號の由來を左右に仰せられたる丹裳小野は、高屋行宮を隔るこゝと遠からざるの地で、天孫の詔し給へる笠狭碕も亦た其の附近たるべきを想察するに足るのである。即ち今兒湯宮崎兩郡の境

界を流るゝ一之瀬川の流域は其の昔笠狭灣澳の跡であると傳へられてゐるのに徴しても、亦た地勢上其の然るべきを首肯することが出来る。

吾田の解

更に之を言葉の上より解釋して、其の地勢と附合するか否やを見るの必要がある。即ち先づ吾田長屋の吾田と言へる名稱を研究せねばならぬ。此の吾田は又た英多、阿多、婀娜、或は阿加田に作られてゐるが、其の阿加田は即ち縣である。畢竟吾田は「あがた」の約言に過ぎないのである。或學者は吾田即ち縣は上田の義で、公田を稱するのであるから、猶ほ後世の御料地と言ふが如きものであると説いてゐるが、未だ以て其の全きを得たる解釋とは言へない。熟按ずるに阿加田の阿加は開であつて開拓

を言ふのであるから、阿加田即ち開田は開拓せられたる土地を指すのであつて、之れが開拓は皆建國の神々及び其の神々の御子孫に依つて行はれたのであるから、縣又は吾田と稱する土地には必ず建國祖神の一族が其の居を占められたもので、石器使用の原人種などは固より開拓耕作の事を知らなかつたのである。之を日向國に就て見ても、景行天皇紀に子湯縣及び諸縣があり、兒湯郡並に諸縣郡名は之より起り、又た南那珂郡に吾田村があり、東臼杵郡に縣があつて、其の縣は元祿五年二月に延岡と改稱せられてゐるが、皆古代に於ける祖神の一族が開拓耕作せられたる土地である。又た薩摩國にも阿多郡阿多があり、阿多隼人などの稱もあり、神武天皇即位の後、各地の縣に主長を置かれたる中にも、大和に於ては猛田縣主、磯城縣主など何れも正

史に其の名を存してゐる。斯う言ふ譯であるから吾田即ち縣は特に或一地方を限れる固有名詞ではなく、建國祖神の一族が新に開拓して住居の地と爲されたる所は皆悉く吾田即ち縣ならざるはないのである。

長屋の解

然れば天孫が楸觸山中より出て新に皇居の地を覓め給へる吾田長屋笠狭の吾田は、日向に於ける吾田即ち縣で、而かも日向には其の縣なるものが各所に散在してゐるから、茲に長屋の位置を定めなければ、又た其の吾田が何れの吾田を指せるものなるかを知るに苦まねばならぬ。然らば其の長屋とは果して日向の内の何處であらうかと言ふに、之を建文八年の圖田帳に見れば、兒湯宮崎の二郡の間に介して那珂と言へる一小郡がある。